

平成 18 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
臨床福祉学専攻

修士論文題目

精神障害者の地域生活を支援する人的資源を拡充するための研究

指導教員（ 津 田 耕 一 ）

社会福祉学研究科 臨床福祉学専攻

学籍番号 20560004 氏名 御前 由美子

目 次

はじめに	3
1 章 精神障害者に対する偏見	6
1. 偏見とは	
2. 精神障害者に対する偏見の背景	
3. 先行研究	
文献・資料	
2 章 精神障害に関するイベントにおける実態調査(調査 1)	26
1. 調査方法	
2. 結果	
3. 考察	
文献・資料	
3 章 精神障害者の地域生活支援者を拡充するためのモデル	36
1. 偏見除去の現状	
2. 多角的アプローチ	
3. 共感性と援助行動	
4. 共感性と動物飼育経験	
文献	
4 章 動物病院受診者の精神障害者に対する意識(調査 2)	44
1. 調査方法	
2. 結果	
3. 考察	
文献・資料	
5 章 動物飼育経験者と非飼育経験者の精神障害者に対する意識(調査 3)	59
1. 調査方法	
2. 結果	
3. 考察	
文献・資料	
6 章 全体の考察	70
文献・謝辞	
おわりに	75

はじめに

WHOによると4億5000万人の人々が、精神障害または神経学的障害などに苦しみながら生きており、その2400万人が統合失調症である（WHO:2004）。

日本の精神障害者は約258万人、また、入院患者の61%が統合失調症である（精神保健福祉士協会:2006）。

「現在、統合失調症で長期の入院を必要とする人は少ない。あったとしても平均入院期間は2週間から4週間にすぎない」（WHO:2004）とされているにもかかわらず、日本においては2003年3月に3年以上入院している患者は54.2%であった。そのうち、「現在の状態でも、居住先・支援が整えば退院可能」な患者について、3年以上入院している患者が41.6%であり、20年以上の入院は9.7%もあった（日本精神科病院協会）。

このようなことを背景に、厚生労働省は、支援があれば地域で生活ができるにもかかわらず、受け皿がないために入院を余儀なくされている社会的入院患者（約72000人）の退院・社会復帰を2003年度からの10年間で目指すという目標を掲げた（障害者基本計画「重点施策実施5か年計画」）。2004年の「精神保健福祉の改革ビジョン」においても、10年以内に約7万人の社会的入院患者の地域生活を可能にすることを目標に掲げた。

このような目標を掲げたにもかかわらず、2006年にはまだ7万人の社会的入院患者があり、大幅な改善はされていない。厚生労働省は再び、「社会的入院状態になっている7万人のうち、2011年度までの6年間で5万人を地域生活に移行してもらう」という2006年度からの移行計画を発表した（読売新聞2006年3月15日）。しかし、この計画もこれまでと同じように、掛け声だけに終わりがねない。

精神障害者は病気の問題だけではなく、住居を貸りる際にも大家に断られること（Alisky, Iczkowski:1990）や収入や仕事などの生活の様々な面で影響を受けている（Link:1982, Link:1987, Link, Cullen et al:1989, Link, Mirotznik et al:1991, Corrigan, Penn:1999）ことが多く、地域生活を困難にしている場合が少なくない。

この背景には「国民の多くの層に見られる精神疾患・精神疾患を有する人々・精神科医療への偏見」（北村:1998）があり、「身体障害者の偏見と異なり、精神障害者への偏見には根強いものがある」（焼山:2003）とされる。

精神障害者も障害者として、地域社会の一員ととらえる考え方は、一般論として育ってきている（竹島, 寺峰他:1997）が、統合失調症患者は危険であるという見方がいまだ根強く残っていることは、これまでの反スティグマ活動が功を奏していないということを示している（深谷:2004）。

偏見を是正するためには、広く考えて、社会構造の変革に力をいれるもの（たとえば、立法化、住居改善、行政命令）、及び人格構造の変容に力をいれるもの（文化交流教育、児童のしつけ、勧告）の2つの類型がある（Allport:1961）

が、これまでに行われてきた研究は偏見の実態やメカニズムの解明を目指した研究が圧倒的に多く、偏見の抑止や解消を直接取り扱う研究があまり行われてこなかった（中村：2001）。

Allport(1961)は「よき隣人」の研究は「悪しき隣人」の研究ほど多くないと述べているが、地域住民の精神障害（者）に対する偏見を除去し、精神障害者の地域生活を支える人的資源を拡充していくためには、「よき隣人」の研究が必要となるだろう。

そのためには、精神障害者が地域生活を送ることに対して否定的でない意識をもつ人を支援者となる可能性のある受容的な人と位置づけ、まず、その属性を知ることが重要であると考えている。そして、そのような属性を持つ人たちを対象にした具体的な啓発活動を行うことにより、一層効果的な偏見除去につながるであろうし、さらに、精神障害者が地域で暮らすために必要なボランティアなどの積極的な支援者が増える可能性があると考えている。

本研究は、精神障害者が地域生活を送るための人的資源を拡充するための具体的な方法を考えることを目的としている。

具体的には、第1章で精神障害者に対する偏見の背景、先行研究の考察を行い、第2章では精神障害に対する理解を得るために現在行われている取り組みの実態をとらえ、第3章で現状を開拓するためのモデルを提示している。さらに、第4章、第5章では、調査を通してこのモデルの実践を可能にするための具体的な提案を行い、第6章で全体の考察を行っている。

文 献

- Alisky, J. M., Iczkowski, K. A. Barriers to housing for deinstitutionalized psychiatric patients. *Hospital and Community Psychiatry*, 41, 1990, 93-95
- Allport, G. W. *The nature of prejudice*. Addison-Wesley, 1961. 原谷道夫, 野村昭訳『偏見の心理』培風館 1969
- Corrigan, Penn Lessons from social psychology on discrediting psychiatric stigma. *American Psychologist*, 54(9), 1999, 765-776
- 深谷裕「精神障害者に対する社会的スティグマの除去」*精神障害とリハビリテーション* 8(2), 2004, 173-179
- 北村俊則「精神疾患を有する人々の社会参加を阻むもの」*精神保健研究* 44, 1998, 3-4
- 厚生労働省精神保健福祉対策本部「精神保健福祉の改革ビジョン」2004年9月
- Link, B. G. Mental patient status, work, and income: An examination of the effects of a psychiatric label. *American Sociological Review*, 47, 1982, 202-215
- Link, B. G. Understanding labeling effects in the area of mental disorders: An assessment of the effects of expectations of rejection. *American Sociological Review*, 52, 1987, 96-112
- Link, B. G., Cullen, F. T. et al. A modified labeling theory approach to mental disorders: An empirical assessment. *American Sociological Review*, 54, 1989, 400-423
- Link, B. G., Mirotnik, J., Cullen, F. T. The effectiveness of stigma coping orientations: Can negative consequences of mental illness labeling be avoided? *Journal of Health and Social Behavior*, 32, 1991, 302-320
- 中村真「精神障害者に対する否定的態度に関する研究の動向(1) —日本国内における実態調査—」*川村学園女子大学研究紀要* 12(1), 2001, 199-212
- 日本精神科病院協会「精神障害者社会復帰サービスニーズ等調査事業報告書」
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/11/s1111-2a.html>
- 日本精神保健福祉士協会編集『精神保健福祉士受験ワークブック 2007』中央法規 2006
- WHO(世界保健機関)編, 中野善達訳『世界の精神保健』明石書店 2004
- 竹島正、寺峰いつ子他「精神保健領域におけるノーマライゼーション推進の視点について」*精神保健研究* 43, 1997, 67-74
- 焼山和憲、伊藤直子他「精神障害者に対する地域住民の社会的距離に関する研究—地域ケアを阻む要因分析—」*西南女学院大学紀要* 7, 2003, 7-18

1 章 精神障害者に対する偏見

1. 偏見とは

偏見(prejudice)という言葉はラテン語の *praejudicium* から由来しており、*prae* は前 (before)、*judicium* は判断(judgement)の意味であり、人種や宗教のメンバー、他の重要な社会的役割についている人に対して以前からの否定的な判断であり、その判断と矛盾する事実について無視して保たれるものである」としている (Jones:1972)。

偏見の定義に関しては多くの研究者が様々な規定をしている。Harding (1954)らは「反応傾向がすぐれて拒否的である場合の異人種に対する態度」であり「簡単にいって異人種に対する非好意的態度」と定義し、Newcomb (1950)は「非好意的態度—他の人々や他の集団にとって「不利な」ように知覚し、行為し、思惟し、感得する傾性である」と定義している。また、「確かな証拠がないのに、特定の集団に属する個人やその集団全体に対して抱かれる強固な非好意的な態度」(吉森:1997)あるいは、「論理的客観的な根拠なしに形成される認知様式であり、特定の対象に対して、特定の集団内の大部分のメンバーたちに共通的に保持される非好意的な認知様式」(中村:1992)、「あるエスニック集団の人に対してエスニック集団への所属を理由にして、好意的でない様式で反応する系統性を持った先有傾向」(Aboud:1988)とするものもある。また、Allport(1961)は「偏見とは、ある集団に所属しているある人が、たんにその集団に属しているからとか、それゆえにまた、その集団のもっている嫌な特質をもっていると思われるとかという理由だけで、その人に対して向けられるけんおの態度、ないしは敵意ある態度」であり、「十分な証拠なしに他人を悪く考えることである」と定義し、「根拠ない判断」と「感情的」という2つの要素が含まれると述べている。

これらの定義から、偏見とは「根拠が無いにもかかわらず他の集団に対して否定的な態度をとること」だといえるだろう。

偏見の近接概念としてステレオタイプがあるが、ステレオタイプは外集団成員の属性についての一連の信念であり、その内容は、肯定的である場合もあれば否定的である場合もあるが、偏見は、否定的な態度と考えられており(山内:1997)否定的ステレオタイプが、偏見の「根」に直結し、絶えることなく再現されることが問題である(今野:1983)。また、偏見は状況によっては強まることやステレオタイプが確認されること、あるいは、ステレオタイプは修正可能(木船:1995)であるのに対し、偏見はひとたび形成されると容易に変化しないという固定性と持続性という特徴も指摘されている(Allport:1961, 上瀬:2002, 今野:1983, 中村:1992, 島田:1963,)。

さらに、偏見的な態度と黒人、ユダヤ人などの少数者集団に対する多数者集団(マジョリティ)の態度とは本質的に異ならないとされている(Tenny:1953,

1953, 山内:1997)。

2. 精神障害者に対する偏見の背景

精神障害者が偏見をもたれるようになった背景には、歴史的な背景、メディア、施設コンフリクト、教育などがあると考えられるが、これらの中でも特に法制、精神医学と民間精神病院、メディアをめぐる問題を取りあげる。

(1) 法制

① 治安対策

精神障害者は社会的防衛や社会的偏見から、苛酷な処遇を受けてきた。

明治初期には精神障害者を収容する施設がなかったため、1874年3月の警視庁命令において、「狂病を発する者はその家族において厳重監護せしむ」とし、家族は精神障害者を厳重に監督し、社会を徘徊させてはならないとした(芹沢:2005)。少なくともこの時代は精神障害者が地域にいたことが認知されていたということがうかがえる。

1878年、警視庁は「瘋癲人私宅鎖錠手続」という規則を定め、精神障害者を座敷牢に監禁する場合は、医師の診断書を添えて警視庁の許可をとることを必要とした(呉:1907, 金子:1973)が、1883年から1894年にかけて起こった相馬事件を契機として、1884年には「瘋癲人取扱心得」により認可なき患者を私立癲狂院に入院させることを禁止し、1894年の「精神病者取扱心得」では、患者の所在を詳細に調査した上での認可や入院後も病院を臨検する(金子:1973)など監禁に関する取締規制が強化されることとなり、精神病院の監督もすべて警察の管轄になった(精神保健福祉士養成セミナー編集委員会:2003, 芹沢:2005)

相馬事件に加えて、1899年の「行旅病人および行旅死亡人取扱法」の制定などを背景に、1900年に「精神病者監護法」が制定された。この法律により監護義務者は家族や親族であるとされ、私宅監置を認めることで精神病者の医療と保護は劣悪な状況に置かれてしまうこととなった(住友他:2002)。

1919年に精神病院法が制定されたが、なお依然として隔離主義が中心とされるものであり、その施行については警察行政に基礎をおくものであった(内務省史)。1950年には私宅監置の廃止を盛りこんだ精神衛生法が制定されたが、1964年に起きたライシャワー駐日米大使刺傷事件を契機として、1965年に改正が行われた。しかし、ライシャワー事件の加害者が統合失調症の青年であったことから、危険な精神病者が放置されているという社会的非難が強く、改正においてもやはり社会的防衛の色彩が目立っていた。

このようにして、わが国の精神保健福祉施策は戦後一貫して社会防衛的隔離・収容の入院主義となっていく。

② 欠格事項

「鍵と鉄格子」のある施設は、刑務所と動物園そして精神病院だといわれた

(滝沢:2003)。戦後の経済復興期には動物園も地方に次々に誕生し、休日などには家族連れや友達連れで賑わったが、上野動物園にはかつて、精神病患者の観覧を禁ずる立て札があったそうである。しかしこれに対し、今まで大勢の患者さんと見学に来たが、なにも問題をおこしていないのに患者さんの楽しみを奪わないでほしいという手紙が届き、立て札のこの部分は消されたそうである(吉岡:1987)。これと同様に、1987年に公衆浴場法が改正されるまでは、浴場への入場制限があった(安田:1995)。

また、精神病の発病に遺伝が重大な影響を与えていると考えられていたため、「精神病其他の疾病を子孫に胎すの危険を多大ならしむものなり。此点より云えば生殖機能ある結婚者が急性の精神病となりたるときにはなるべく早く入院せしめ特に之を監禁するの必要あり」(呉:1918)とし、また、「精神病の治癒することは中々少ない」ため、「予防の第一は遺伝を避けることで、～その人の結婚を止めなければならぬ、然し人々の結婚乃至配偶を止めることは中々出来ない。それには法律の力による外はない」(呉:1930)と、法律で結婚を禁止しなければならないと呉秀三は述べている。このようなことから、旧優生保護法が母体保護法に改正されるまで統合失調症などを遺伝性疾患と断定し、「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」(優生保護法第1条)として、一覧表をつけていた。

精神疾患というだけでさまざまな権利を奪う欠格事項は2001年に絶対的欠格から相対的欠格へと改正されている。

③犯罪に関する取り扱い

平成17年度版の犯罪白書によると、平成16年における交通関係業過(業過:業務上過失致死傷及び重過失致死傷をいう)を除く刑法犯(一般刑法犯)の検挙人員は38万9,297人である。このうち精神障害者は915人、精神障害の疑いのある者は1,373人であり、これらの者が一般刑法犯検挙人員に占める比率は、0.6%である。99.4%は精神障害者ではない人による犯罪である。精神障害者の犯罪率は高いとはいえず、2001年10月13日の「自民党プロジェクトチーム」による検討結果の報告書においても「精神障害者が犯罪を犯しやすいというのは、統計数字で見ても明らかな誤解である」とされ(滝沢:2003)、再犯率も健常者に比べて低いことが明らかになっている(阿形他:2003)。

しかし、刑法39条では、「心神喪失者の行為は、罰しない。心神耗弱者の行為は、その刑を減輕する」と規定している。このため、平成17年版の犯罪白書によると平成16年において検察庁で不起訴処分になった被疑者のうち、心神喪失者と認められた者は324人、心神耗弱者と認められた者は237人、通常第一審で心神喪失を理由に無罪になった者は7人、心神耗弱を理由に刑を減輕された者は81人であった。これら649人のうち措置入院は383人、実刑・身柄拘束は55人であった。

精神病患者の罪に対しては、701年大宝律令において精神病の状態を「謂癲者。発時仆地吐涎沫無所覺也。狂者。或妄触欲走。或自高賢稱聖神者也」とし、特

別な取り扱いをするように規定され（金子：1973）、その改訂版である 718 年の養老律令にも刑罰を減免する規定が記されている（小俣：1998, 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会：2003）。また、『古事記』において、スサノオノミコトが犯した罪に対し、姉のアマテラスは、「屎如すは、酔ひて吐き散らす登許曾我が那勢の命、如此爲つらめ」とあり、あの子は酔っているのだからと、その免責をはかっている。さらに、『百箇条調書』（77 条）では「人を殺候ものハ乱心にてても下手人疵付候得ハ夫々相当之御咎可有之事ニ候処御吟味之上乱心ニ無紛相聞主殺親殺之外ハ被殺候もの之主人親兄弟妻子等迄御免之願申出候得は御伺御差図之上近キ親類之内へ永預ケ被御申付候哉之事」とある。乱心者であつても人殺しは死刑だが、乱心に紛れも無く、殺された方の主人や親兄弟妻子が許せば死刑ではなく、親類に永く預けられたようである。

このように、「すでに日本の古代社会では、人が酩酊のゆえに狂気におちいり、その結果、共同体のタブー侵犯である天つ罪や国つ罪のような反社会的行為を犯すことがあること、その際に、常人と同様の処分をすることは妥当でないことが認識されていたようである」（小田：1990）。

精神障害者の責任能力を低く見るこのような法律が一般市民の反感をよび偏見を深め、近寄らない原因を作ったことは否定できない。このため、精神障害者が事件を犯した場合も法のもとで平等に裁かれるべきだという声が当事者から聞かれるようになっていく（東他：2002）。

（2）精神医学と民間精神病院

「精神病者監護法」により合法化された私宅監置の状況は「殆ど見るに堪えざる程悲惨な光景」であり、精神病者監護法という「監置施行の実情よりして考うれば、寧ろ当然の結果と云うべし」で、精神病者は「この邦に生まれたる不幸」であると呉秀三ら（1918）は嘆き、石川貞吉も「まるで鳥の籠のようなものに入れて置くというようなひどいもの」と、私宅監置を批判した（芹沢：2005）。また、呉ら（1918）は数少ない公立病院である東京府癲狂院においてさえも「極端に言えば動物の飼養にも似たもの」と報告した。

しかし、「精神病者は仮面に隠れてその中に害毒を流しつつある」（呉：1918）ため、精神病者を病院に収容することで、社会の安寧・秩序を維持し、病者の危険・犯罪行為を防げることができ、病院の普及は病者自らの幸福を増進し、社会の福祉を促進するとした（呉ら：1918）。さらに、呉は「殺人放火をしても、精神病の為であれば、無罪として放免になる。～これを取締る方法や施設がないとは驚くべき事実である。一体精神病者は犯罪をなすことが少なくないものである。～百人の内で四十人の割合」であるとした（呉：1906）。

このように、当時の精神医学が未熟であったために、遺伝が精神病の発病に与える影響ともあいまって、公立精神病院の設置、そしてそれを促進するための精神病院法の制定が急務であるとし、日本医学会では 1918 年に「精神病者は適当なる治療を加ふれば全癒すべきもの少からざるものなり」と公衆の安寧のために保護治療設備の整備のための内務大臣宛建議を可決した（金子：1973）。

呉らの私宅監置の状況が報告された翌年の1919年、「精神病院法」が施行され、官公立精神病院の設立を義務付けた。しかし、「精神病院法第七条の規定に依る代用精神病院に関する件」が8月に施行された（樫田：1922）ことにより、私立病院が官公立病院に代わることができるようになり、私立病院だけが増加した。1920年頃には精神科病床が私宅監置数を上回った（岡田：1999）ものの、精神病院法が施行された後も精神病患者監護法が残っていたために、1935年（昭和10年）において、官公立精神病院が6施設、私立病院が133施設であったのに対し、私宅監置は7000を越えていたということである（秋元：2000）。

1949年には「日本精神病院協会」が設立されたが、その設立趣意書には『世相の安定は精神病院の復興から』『社会の平和は精神病院から』『日本の復興は精神病院から』との決意をもって」という文言があったとのことである（滝沢：2003, 芹沢：2005）。精神衛生法が1950年に制定され私宅監置が廃止となり、日本精神病院協会は精神病院の整備増床の融資が必要だという陳情（1954年）を行い、1960年には医療金融公庫からの低利長期融資が始まった。また、同時期に措置入院に関する国家予算が大幅に増大した。さらに、「人工冬眠」（患者を手術のショックから守るための麻酔法）に用いられていたクロルプロマジンの抗精神病作用が1952年に発見され、日本でも1958年ごろから広く使われ出し（昼田：1999, 吉岡：1987）、これが「化学的拘束衣」の役割を果たした。また、職員不足のために昭和30年代から40年代にかけては入院患者100人に常勤医が1人程度というのが平均的で、無資格の看護職員も多かった（風祭：1998）ようである。加えて、医療法施行規則（1948年）や厚生次官通知・医務局長通知（1958年）により、精神病院の医師は他科の3分の1、また、看護師は患者6人に1人とされたが確保できない場合はやむを得ないとし、精神病院は手薄でよいとされた。

この結果、敗戦時には約4000に減少していた病床が1950年（昭和25年）には約18000床となった。1960年（昭和35年）に医療金融公庫が設けられたことで年間2〜3万床のペースで急増し（高柳：1998）、1965年（昭和40年）には1068院、約164000床となった。さらに、1967年（昭和42年）には20万床を超え、1970年（昭和45年）には1364院、病床数は242000床になり、1980年（昭和55年）にはついに30万床を突破している（住友：2002, 風祭：1998）。

精神病院は「牧畜業」「収容所」と広言されたように「儲かる精神病院」がブームを呼び、建設業者、金貸業者、呉服商までもオーナーとなり、新設された民間の精神病院のうち精神科医による病院は4分の1にすぎなかった（芹沢：2005, 大熊：1991）。

1983（昭和58）年における診療報酬に関して、入院患者1人当りの平均診療収入は16200円であったのに対し、精神科は最低の7500円であった。しかし、入院医療費に占める入院費が82.5%（1984年）であったことから、患者を入院させておくだけで治療活動をほとんどせず、治療者の人員を減らすことで多くの精神病院は収益をあげた。県によっては長者番付け10位のなかに、2人も3人も精神病院の長が入るといった現象がみられたのである（吉岡：1987）。

また、東京の病床数の3分の2は三多摩地域に集中していた（大熊：1991）と
いうように、精神病院は地価の安い交通の不便な僻地に地域とのかかわりが
なく建設された。昭和30年代から40年代にかけて設立された精神病院の大部分
は、生活水準の最低基準を満たす程度の大病院を建て（風祭：1998）、人件費を
切り詰め、選り好みせずに患者を収容し、閉鎖病棟をやめたがらないという事
態を生み出した。このようにして、人里離れた鉄格子のある精神病院に入院し
た患者は地域社会の一員ではなくなり、忘れ去られる存在となった。

（3）メディア

①通院歴報道

歴史的にメディアが精神障害者の犯罪を大きく取り扱うようになったのは、
1964年3月、ライシャワー米国駐日大使が統合失調症の19歳の少年に刺され
負傷する事件が起きた時、新聞が「野放し精神異常者」と書きたてたことがき
っかけになったようである（吉岡：1987, 芹沢：2005）。

その後、メディアの世界では精神障害者のことを「隠されるべき存在」とし
ての象徴として「マルセイ」とよび、不用意なニュースコメントや記事による
人権侵害のために処分されるなどの破滅的な事態になるのを恐れ、できればふ
れたくない、扱いにくい人々として意識されていた。また、写真や名前を報道
することは人権侵害であるという考えから、人権保護の名の下に彼らの名前と
顔を報道してこなかった。しかし、視聴者や読者になぜ匿名扱いにしているの
かを納得させるために、「通院歴報道」を行い、犯人は精神障害者だと伝える方
法をつくったのである。このような報道パターンは「精神科に通院していた」
ことと「犯罪」とを直接結びつける結果となった。このため、1999年改定の「報
道倫理ガイドライン」では、「実名・匿名の判断は慎重に行う・・・いずれの選
択を行う場合でも、放送では原則的に通院歴・治療歴または病名等は明示しな
い」と規定された（斉藤：2002）。

しかし、2003年12月18日におきた宇治小学校事件では実名の報道はなく、
以前と同じような精神科に通院・入退院歴の報道がなされた。（読売新聞、朝日
新聞、毎日新聞 2003年12月19日）

また、統合失調症が危険な病気であるかのような印象を与えてしまう解説が
行われていることもあった。（朝日新聞 1982年7月5日、毎日新聞 1982年7月
5日）

このような報道は、精神障害者一般、そして精神科に通院する人々に対して
の著しい偏見を助長することになったと考えられる。

②影響

メディアの影響がスティグマ、拒否などの態度を形づくる要因になる
（Steadman, Coccozza：1978, Wahl：1992）という報告がされている。

いつの時代にも、メディアは逸脱現象に関心をもっていた（栗岡：1987）。多
くのタブロイド版の新聞はセンセーショナルなスタイルで報道し（Barnes：

1993)、元精神病患者を扱った記事の86%が殺人、大量殺人といった暴力的な犯罪に焦点を当てていた (Angermeyer, Matschinger:1996)。また、ゴールデンタイムに放映された多くのテレビドラマが、精神障害者を暴力的或いは殺人的なものとして表現しており、暴力が一般的な人によるものは40%だったのに対し、精神障害者は73%、殺人においても一般的な人によるものは10%に対し、精神障害者は23%だった (Gerbner et al.:1981)。また、1994年に報道された精神障害者に対するニュースでは暴力についての報道の方が共感的な報道よりも4対1の割合で多いということも報告 (Philo:1994) や、50%の人が精神障害者は公共施設に放火することが「よくある」と答えている (O' Grady:1996) という報告もされている。

1950年のアメリカ精神医学会において、一般市民は精神医学的文献よりも、むしろ小説、推理小説、劇、映画やラジオ番組のようなものからその知識を得ているという発言があった (Crocetti, et al.:1974) とされ、また、精神病院の入院患者を扱った映画を鑑賞した後に精神疾患への態度が否定的に変化したという報告 (Domino: 1983) もある。

Wahlら(1992)は1965年から1988年までの雑誌においてメンタルヘルスに関する記事が大幅に増えており、スティグマの少ない言葉を使うようにしていることから、このような記事は一般の人のメンタルヘルスに関する知識を増やすことに役立つと述べている (Wahl et al.:1992)。

日本においても「精神障害者」のイメージはどこからくるかについて、テレビと答えた人が7割を超えており (東口, 森河, 中川他:1997)、「精神障害者に対する考え方を得たところ」は「テレビ・新聞・雑誌の報道から」が61.5%、「自分自身の経験から」が38.2% (竹島他:1997) であり、さらに、「事件報道から情報を得た人は、精神病の社会対人的なイメージが悪く、偏見が強いことが見出された。その一方で、ドキュメント報道から情報を得た人は精神内界イメージが良い傾向がある」 (坂本他:1996) という研究があるように、メディアから得る情報の影響は大きい。また、「きちんとしたケアを受けている精神障害者は特に他人に危害を加えることはない」という情報に関し、精神障害者について「本やテレビ等で少しは知っている」と答えた人の6割以上が、また、「知らない」と答えた人の5割以上が「そうかも知れない」と考えている。これに比べ、「会ったり話したりしたことがある」人のうち、「そうかも知れないと思う」は40%、「信じることができる」は25% (全家連:1998) であり、精神障害者との接触体験の少ない人ほどメディアの影響を受けやすいといえる。さらに、マスコミ報道は、社会のために役に立っていると考える人は85%にのぼり (朝日新聞 2002年10月13日)、65%の人がニュースキャスターの発言に影響を受けると答えている (「ニュース 23」2004年1月5日)。

このように、メディアは役に立つ反面、人々に与える影響力もそれだけ大きいことを示しており、精神障害(者)に関する知識をもたない人や接触経験のない人に対して正しい情報提供に努める必要がある。メディアのインパクトは以前よりも大きくなっている (Angermeyer, Matschinger:1996) とされる中、今

後、メディアは精神障害に対する関心を高め、偏見を除去する役割も担っているといえるだろう。

3. 先行研究

先行研究に関しては、論文、雑誌、図書などに引用された文献の中から、可能な限りの資料を集め、その中から一般市民の精神障害者に対する全般的な意識や態度の記述のあるもの、また、属性に関しては、性別・年齢・学歴・職業・収入・知識・接触体験を調査したものを選んだ。

(1) 精神障害者に対する一般市民の意識・態度の変容

精神障害者に対する一般市民の意識・態度については1950年代からアメリカで様々な調査が行われるようになり、Star (1955)、Cumming & Cumming (1957)、Nunnally (1961) などが初期の研究として有名である。

Starが行った調査では、一般市民は精神障害に関する十分な知識を持っておらず、反応は否定的であったと報告した。そして、Cumming & Cumming も、一般社会の態度は精神病を拒絶し隔離するものであり、6か月間のキャンペーン後も否定的な態度に変化はなかったと報告した。また、Nunnally (1961) も、教育のある人も無い人も、高齢者も若い人も「やや危険で、不潔でその行動が予想しがたく、価値がない」と考えているとし、StarやCumming & Cummingと同様に社会の態度は否定的であるという報告をしている。

日本の初期の研究としては、加藤正明ら (1962) が看護婦、保健所保健師、公衆衛生教育関係職員を対象に、また、山村道雄ら (1967) が精神障害者の家族を対象に調査を行っている。一般市民の態度に関する調査としては、福島県原町市の一般住民を対象にした進藤隆夫 (1968) の調査などが初期の研究といえるだろう。

一般市民の態度に関しては「マスコミ、教育、精神衛生に関する諸法律の整備、地域精神衛生活動によって、精神障害に関する知識が増大し、確かに精神障害への否定的なステレオタイプは続いてはいるが、精神障害者に支援的な態度をとる人が増大したといわれるようになっていく」(宗像:1984)あるいは、「少なくとも治療の可能性や社会復帰という観点からは、統合失調症に対する世間の見方が改善している」(WPA:2002)とされるように、精神障害者に対する世間の態度は改善されてきているという報告 (Woodward:1951, Lemkau et al.:1962, Meyer:1964, Bentz, et al.:1969, 竹島他:1997, 全家連:1998) がある。しかし一方で、あまり変化がないとするもの (D'Arcy et al.:1976, Thompson et al.:2002) や、逆に「恐ろしい」というイメージが増大しているという報告 (Phelan et al.:2000) もある (資料1)。さらに、イギリスでは50%以上の人が精神障害者は公共施設に放火することがあると考えているという調査結果

(O'Grady:1996) もある。

Crosbyら (1980) や Dovidioら (1992) は、アメリカにおける人種差別に関

する調査において、偏見は減少しているかに見えるが、これは、社会規範や社会の望ましさの変化が影響しているためであると述べている。社会的望ましさは被験者が社会的規範からみて望ましいとされる方向で設問に答える反応形式であり、設問の内容が心理的なものである場合にはことに影響が強くなることが予想される（北村他：1986）ため、基本的な態度は変わっておらず、偏見はいまだに強いと述べている。

（２）精神障害者に対する意識・態度と属性との関連

次に、精神障害者に対する意識・態度と性別・年齢・学歴・職業などとの関連を調べた研究を属性ごとに整理することにする。

精神障害者に対する態度と性別とは関連しないとするもの（Whatley:1959, Brockington et al.:1993, Wolff et al.:1996, 岡上他:1986）や女性の方が否定的とするもの（藤本他:1973, 東口, 木場他:1997, 焼山他:2003）、逆に男性の方が否定的とするもの（東口, 森河, 三浦他:1997）などがある（資料 2）。

また、年齢に関しては、若い人の方が肯定的とするものが多い（Woodward:1951, Cumming, Cumming:1957, Whatley:1959, 加藤他:1962, 進藤:1968, 藤本他:1973, 岡上他:1986）が、逆に高齢になるほど社会的距離が減少するという報告（全家連:1998）もある（資料 3）。

学歴に関しては、高学歴の方が肯定的とするものが多い（Ramsey et al.:1948, Whatley:1959, Brockington et al.:1993, 進藤:1968, 藤本:1973, 岡上他:1994）一方、関連がないとするもの（Dohrenwend et al.:1967）もある（資料 4）。

職業に関しても、高い職業レベルは肯定的とするもの（Ramsey et al.:1948, Dohrenwend et al.:1967）もあれば、職業レベルは関連がないとするもの（Wolff et al.:1996）もあり、さらに、収入についても高い方が肯定的（Whatley:1959）、中位が肯定的（全家連:1998）、低い方が肯定的（藤本他:1973）などさまざまである（資料 5）。

これらの他に、収入が多く都会に住んでいる回答者は、精神障害者に対してより否定的なイメージを抱いているとするもの（Martin et al.:2000）や高文化、高都市化につれて治療的（受容的）態度は高くなる（進藤:1968）、あるいは、団地は拒否的であり住宅地域は受容的（藤本:1973）、既婚者よりも独身者の方が受容的（Whatley:1959）であるという報告もある。

以上のように、様々な研究者が精神障害者に対する意識・態度と属性との関連を調べているが、どの属性においても一貫した結果が得られていないことがわかる。

しかし、もし一貫した結果が得られたとしても、学歴や職業、収入などは外から見てわからない属性であるため、そのような属性を持つ特定の人に働きかけていくことは困難であり、このような属性への固執は精神障害者への住民理解を促進する鍵とはならないのではないだろうか。

(3) 精神障害者に対する意識・態度と知識・接触体験との関連

次に、精神障害者に対する否定的な態度を軽減していくための方法については、精神障害（者）に関する知識の普及と精神障害者との接触体験が有効であるとされているため、知識や接触体験と態度との関連を調べたものについても整理をする。

精神障害（者）に関する知識に関しては、ほとんど影響しないとするもの（Freeman et al.:1960）もあるが、日本においては正しい知識がある場合は肯定的であるとされている（大島他:1989）（資料 6）。

精神障害者との接触体験との関連では、接触体験のある人は肯定的とするもの（Brockington et al.:1993, 岡上:1986, 大島他:1989, 蓮井他:1999）がある一方で、関連しないとするもの（Whatley: 1959）、接触の期間や質、密度の違いで異なるとするもの、主体的な接触体験は影響を及ぼすが、知人に精神障害者がいるなどの外的条件では関連しないとするもの（Yamamoto et al.:1996, 大島:1992, 與古田他:1997, 中村:2002, 田中:2004）もある（資料 7）。

Allport (1961) は偶然の接触はむしろ偏見を増すと述べており、また、外集団との表層的接触が偏見を生みやすく密接な個人的接触は態度変容がおこるということを示唆した研究があるように（山内: 1997）接触の状況や質の違いが様々な結果を生み出していると考えられる。

接触体験に関しては、接触体験のある人は肯定的であるとする報告が全体的には多いといえるだろう。

文 献

- About, F. E. Children and Prejudice. New York, Basil Blackwell, 1988 フランシス・アブード 栗原孝他訳『子どもと偏見』ハーベスト社 2005
- 阿形恒秀, 石神互他『思春期理解とこころの病』解放出版 2003
- 秋元波留夫「刊行に寄せて」呉秀三、樫田五郎 1918『精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察』創造出版 2000
- Allport, G. W. The nature of prejudice. Addison-Wesley, 1961. オルポート 原谷道夫, 野村昭訳『偏見の心理』培風館 1969
- Angermeyer, M. C., Matschinger, H. The effect of violent attacks by schizophrenic persons on the attitude of the public towards the mentally ill. Social Science and Medicine, 43(12), 1996, 1721-1728
- Barnes, R. C. Mental illness in British newspaper (or my girlfriend is a Rover Metro). Psychiatric Bulletin, 17, 1993, 373-674
- Bentz, W. K., Edgerton, J. W., Kherlopian, M. Perceptions of mental illness among people in a rural area Mental Hygiene, 53, 1969, 459-465
- Brockington, I. F. Hall, P. Levings, J. et al. The community's tolerance of the mentally ill. British Journal of Psychiatry, 162, 1993, 93-99
- Crocetti, G. M., Spiro, H. R., Siassi, I. Are the ranks closed? Attitudinal social distance and mental illness. American Journal of Psychiatry, 127, 1971, 1121 -1127
- Crocetti, G. M., Spiro, H. R., Siassi, I. Contemporary attitudes towards mental illness, University of Pittsburgh Press, 1974. クロセティ他, 加藤正明訳『偏見・スティグマ・精神病』星和書店 1978
- Crosby, F., Bromley, D., Saxe, L. Recent unobtrusive studies of black and white discrimination and prejudice: A literature review. Psychological Bulletin, 87, 1980, 546-563
- Cumming, E., Cumming, J. Closed Ranks. An Experiment in mental health education. Cambridge, Harvard University Press, 1957
- D'Arcy, C., Brockman, J. Changing public recognition of psychiatric symptoms? Blackfoot revisited. Journal of Health and Social Behavior, 17, 1976, 302-310
- Dohrenwend, B. P., Chin-Shong, E. Social status and attitudes toward psychological disorder: The problem of tolerance of deviance. American Sociological Review, 32, 1967, 417-433
- Domino, G. Impact of the film "one flew over the cuckoo's nest" on attitudes towards mental illness. Psychological Reports, 53, 1983, 179-182
- Dovidio, J. F., Fazio, R. H. New technologies for the direct and indirect assessment of attitudes, In J. M. Tanur (ed.), Questions about questions: Inquiries into the cognitive bases of surveys, New York, Russell Sage, 1992

- Elinson, J., Padilla, E., Perkins, M. Public image of mental health services. Mental Health Materials Center, New York, 1967
- Freeman, H. E., Kassebaum, G. G. Relationship of education and knowledge to opinions about mental illness, *Mental Hygiene*, 44, 1960, 43-47
- 藤本忠明, 小花和昭 介「精神障害者に対する偏見の規定要因について」追手門学院大学文学部紀要 1973, 140-151
- 布施弥平治編『百箇条調書第1巻』新生社 1966
- 布施弥平治編『百箇条調書第12巻』新生社 1968
- Gerbner, G., Gross, L. et al. Health and medicine on television. *The New England of Medicine*, 305(15), 1981, 901-904
- Harding, J., Kutner, B., et al. Prejudice and ethnic relations, in G. Lindzey (ed.) *Handbook of Social Psychology*, 2, 1954 田村栄一郎訳『偏見と人種関係』社会心理学講座 3(4)みすず書房 1957
- 東雄司, 江畑敬介監修『みんなで進める精神障害者リハビリテーション』星和書店 2002
- 蓮井千恵子, 坂本真士他「精神疾患に対する否定的態度—情報と偏見に関する基礎的研究—」季刊 精神科診断学 10(3), 1999, 319-328
- 東口和代, 木場深志他「精神障害者に対する態度に関連する心理的要因についての実証的研究—Health Locus of Control との関連—」北陸公衆衛生 24, (1), 1997, 16-20
- 東口和代, 森河裕子, 三浦克之他「接触体験が精神障害(者)への態度の変容におよぼす効果—医学生における臨床実習の場合—」コミュニティ心理学研究 1(2), 1997, 173-186
- 東口和代, 森河裕子, 中川秀昭「精神障害(者)に対する態度についての測定尺度の作成—信頼性と妥当性の検討—」心と社会 89, 1997, 110-118
- 昼田源四郎「病院精神医療から地域精神医療へ」こころの科学 86, 1999, 81-86
- 法務省「平成17年版犯罪白書のあらまし」
http://www.moj.go.jp/HOUSO/2005/hk1_2.html#2-0
- 星越活彦, 州脇寛他「精神病院勤務者の精神障害者に対する社会的態度調査—香川県下の単科精神病院勤務者を対象として—」日本社会精神医学会雑誌 2(2), 1994, 93-104
- Jones, J. M. Prejudice and racism. Reading, Mass, Addison-Wesley, 1972
- 上瀬由美子『ステレオタイプの社会心理学』サイエンス社 2002
- 金子準二編著『日本精神医学年表』日本精神病院協会 1973
- 樫田五郎 1922『日本ニ於ケル精神病学ノ日乗』(復刻版) 創造出版 2003
- 加藤正明, 中川四郎他「精神衛生並に精神障害に対する認識及び治療的態度に関する研究(第1報)—社会的態度と治療的態度との関連—」精神衛生研究 10, 1962, 1-15
- 風祭元「日本における精神病院の歴史」こころの科学 79, 1998, 26-31
- 北村俊則, 鈴木忠治「日本語版 Social Desirability Scale について」社会精

- 神医学 9(2), 1986, 173-181
- 木舩憲幸「偏見」小川一夫監修『改訂新版 社会心理学用語辞典』北大路書房 1995
- 栗岡幹英「事件報道における差別と偏見の再生産」『これからの精神医療』法学セミナー増刊・総合特集シリーズ 37, 日本評論社 1987, 79-85
- 『古事記 祝詞』倉野憲司校注, 岩波書店 1993
- 今野敏彦『新編偏見の文化』新泉社 1983
- 呉秀三 1906「なぜに癲狂院の設立に躊躇するや」『呉秀三著作集第 2 巻』思文閣 1982
- 呉秀三 1907『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設 附日本ニ於ケル精神病学ノ日乗』(復刻版) 創造出版 2003
- 呉秀三 1918「精神病者の救済並びに精神病学的社会問題」『呉秀三著作集第 2 巻』思文閣 1982
- 呉秀三 1930「社会問題としての精神病」『呉秀三著作集第 2 巻』思文閣 1982
- 呉秀三, 樫田五郎 1918『精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察』(復刻版) 創造出版 2000
- 栗岡幹英「事件報道における差別と偏見の再生産」『法学セミナー増刊 これからの精神医療 37』日本評論社 1987
- Lemkau, P. V., Crocetti, G. M. An urban population's opinion and knowledge about mental illness. *American Journal of Psychiatry*, 118, 1962, 692-700
- Martin, J. K., Pescosolido, B. A., Tuch, S. A. Of fear and loathing: The role of 'disturbing behavior', labels, and causal attributions in shaping public attitudes toward people with mental illness. *Journal of Health and Social Behavior*, 41, 2000, 208-223
- Meyer, J. K. Attitudes toward mental illness in a Maryland community. *Public Health Reports*, 79(9), 1964, 769-772
- 三浦岱栄, 笠松章他「精神障害に対する認識および治療的態度に関する研究(第 2 報)」*精神医学* 5(12), 1963, 23-29
- 宗像恒次『精神医療の社会学』弘文堂 1984
- 中村真, 川野健治「精神障害者に対する偏見に関する研究—女子大生を対象にした実態調査をもとに—」*川村学園女子大学研究紀要* 13(1), 2002, 137-149
- 中村陽吉『心理学的社会心理学』光生館 1992
- Newcomb, T. M. *Social psychology*. Dryden Press, 1950 ニューカム 森東吾, 萬成博他訳『社会心理学』培風館 1956
- Nunnally, J. C. Jr. *Popular conceptions of mental health: Their development and change*. New York. Holt, Rinehart and Winston, 1961
- 小田晋『日本の狂気誌』思索社 1990
- O' Grady, T. J. Public attitudes to mental illness. *British Journal of Psychiatry*, 168, 1996, 652(letter)
- 岡田靖雄「日本における精神医学の 100 年」*こころの科学* 86, 1999, 87-91

- 岡上和雄, 石原邦雄「精神障害(者)に対する態度と施策への方向づけ」社会保健研究 21(4), 1986, 373-385
- 岡本隆寛, 阿部由香他「精神看護実習前後における看護学生 of 精神科に対するイメージの変化(第1報)」順天堂医療短期大学紀要 13, 2002, 88-95
- 大熊一夫『この国に生まれたる不幸—1 精神病院の話』晩聲社 1991
- 小俣和一郎『精神病院の起源』太田出版 1998
- 大島巖「精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度」精神保健研究 38, 1992, 25-37
- 大島巖, 上田洋也他「精神障害者施設とのコンフリクトを経験した大都市近郊新興住宅地域住民の精神障害者観—(その1) 障害者との接触体験、および弱者体験との関連—」精神保健研究 38, 1992, 11-23
- 大島巖, 山崎喜比古他「日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観—開放的な処遇をする—精神病院の周辺住民調査から—」社会精神医学 12(3), 1989, 286-297
- 大霞会編『内務省史第3巻(明治百年史叢書)』原書房 1980
- Penn, D. L., Guynan, K. et al. Dispelling the stigma of schizophrenia: What sort of information is best? Schizophrenia Bulletin 20, 1994, 567-578
- Phelan, J. C., Link, B. G., Stueve, A., Pescosolido, B. A. Public conceptions of mental illness in 1950 and 1996: What is mental illness and is it to be feared? Journal of Health and Social Behavior, 41, 2000, 188-207
- Philo, G. Media images and popular beliefs. Psychiatric Bulletin, 18, 1994, 173-174
- Ramsey, G. V., Siepp, M. Attitudes and opinions concerning mental illness. Psychiatric Quarterly, 22, 1948, 428-444
- 齊藤道雄「メディアと精神障害者」東雄司、江畑敬介監修『みんなで進める精神障害リハビリテーション』星和書店 2002
- 坂本真士, 丹野義彦「精神疾患への偏見の形成に与る要因の検討(Ⅱ)—接触体験の欠如とメディアからの情報について」日本教育心理学会発表論文集 38, 1996, 307
- 坂本真士, 杉浦朋子他「精神疾患への偏見の形成に与る要因—社会心理学的手法によるアプローチ—」精神保健研究, 44, 1998, 5-13
- 精神保健福祉養成セミナー編集委員会『精神保健福祉論』精神保健福祉士養成セミナー4, へるす出版, 2003
- 芹沢一也『狂気と犯罪』講談社 2005
- 島田一男『社会心理学の基底 態度の心理学』大日本図書 1963
- 進藤隆夫「精神障害者に対する住民の意識態度」公衆衛生 32(3), 1968, 46-54
- Star:1955 Martin, J. K., Pescosolido, B. A., Tuch, S. A. Of fear and loathing: The role of 'disturbing behavior', labels, and causal attributions in shaping public attitudes toward people with mental illness. Journal of Health and Social Behavior, 41, 2000, 208-223

- Steadman, H., Coccozza, J. Selective reporting and the public's misconceptions of the criminally insane. *Public Opinion Quarterly*, 41, 1978, 523-533
- 住友雄資, 長崎和則他『精神保健福祉実践ハンドブック』日総研, 2002
- 高柳功「精神保健福祉法と精神病院」*こころの科学* 79, 43-48, 1998
- 竹島正, 寺峰いつ子他「精神保健領域におけるノーマライゼーション推進の視点について」*精神保健研究* 43, 1997, 67-74
- 滝沢武久『精神障害者の事件と犯罪』中央法規 2003
- 田中悟郎「精神障害者に対する住民意識—自由回答の分析—」*共生社会学* 4, 2004, 31-41
- 谷口房枝, 森澤幸子他「地域住民の精神障害者への意識調査を実施して」*日本精神科看護学会誌* 45(2), 2002, 52-55
- Tenny, T. W. The minority status of handicapped. *Exceptional Children*, 20, 1953, 260-264
- Thompson, A. H., Stuart, H. Bland, R. C. et al. Attitudes about schizophrenia from the pilot site of the WPA worldwide campaign against the stigma of schizophrenia. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 37, 2002, 475-482
- Wahl, F. O. Mass media images of mental illness: a review of the literature. *Journal of Community Psychology* 20, 1992, 343-352
- Wahl, F. O., Kaye, L. A. Mental illness topics in popular periodicals. *Community Mental Health Journal* 28, 1992, 21-28
- Whatley, C. Social attitudes toward discharged mental patients, *Social Problems*, 6, 1959, 313-320
- Wolff, G. Attitudes of the media and the public, in, Leff, J. (ed.) *Care in the community: Illusion or reality?* New York, Wiley, 1997
- Wolff, G., Pathare, S., Craig, T. et al. Community attitudes to mental illness. *British Journal of Psychiatry*, 168, 1996, 183-190
- Woodward, J. L. Changing ideas on mental illness and its treatment. *American Sociological Review*, 16, 1951, 443-454
- WPA. Schizophrenia -Open the door-. 2002. 日本精神神経学会監訳『こころの扉を開く—統合失調症の正しい知識と偏見克服プログラム—』医学書院 2002
- 矢島まさえ, 梅林奎子他「山間地域における精神保健福祉に関する住民意識—精神障害者と接した体験の有無による比較—」*群馬パース学園短期大学紀要* 5(1), 2003, 3-12
- 焼山和憲, 伊藤直子他「精神障害者に対する地域住民の社会的距離に関する研究—地域ケアを阻む要因分析—」*西南女学院大学紀要* 7, 2003, 7-18
- Yamamoto, K., Randall, M., Tkeda, M. Leelamanit, W. Attitudes of medical students towards person with mental disorders: A comparative study between Japan and Thailand. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 50,

1996, 171-180

山村道雄, 米倉育男他「精神障害者に対する家族の態度調査—家族会との関連において—」精神医学 9(12), 1967, 34-38

山内隆久『偏見解消の心理 対人接触による障害者の理解』ナカニシヤ出版 1997

安田好弘「精神障害者に対する資格制限の現状と課題」ノーマライゼーション 障害者の福祉 15(通巻 172), 1995, 17-19

與古田孝夫, 与那嶺尚子他「精神障害者との接触経験からみた精神障害に関する住民意識についての検討」臨床精神医学 26(4), 1997, 485-492

吉森護編『人間関係の心理学ハンドブック』北大路書房 1997

吉岡眞二『精神科医の訴え』岩波ブックレット 86, 岩波書店 1987

全国精神障害者家族会連合会『精神障害者観の現状' 97』ぜんかれん保健福祉研究所モノグラフ 22, 1998

資料 1

精神障害者に対する意識・態度

発表年 執筆者

1951	Woodward	専門的治療が必要という信念が社会一般に広がっている
1962	Lemkau	圧倒的多数が在宅ケアに好意的
1962	Lemkau, Crocetti	受け入れは良くなっている
1964	Meyer	受け入れは良くなっている
1967	Elinson, Padilla et al.	ニューヨーク市は一般に肯定的
1969	Bentz, Edgerton et al.	受け入れは良くなっている
1969	Edgerton, Bentz	受け入れは良くなっている
1971	Crocetti, Spiro et al.	受け入れは良くなっている
1976	D'Arcy, Brockman	認識はCumming & Cummingの時とあまり変わらない
1993	Brockington, Hall et al.	限定はあるものの大部分は受容的
2000	Phelan, Link et al.	精神障害の概念は広がっているが「恐ろしい」イメージは増大
2002	Thompson, Stuart et al.	態度変化はほとんどなし(天井効果)
1997	竹島正、寺峰いつ子他	精神障害者も地域の一員という考え方は育ってきている
1998	全家連	1983年と比較して肯定的態度あるいは保留的態度が増加

資料 2

性別と精神障害者に対する意識・態度との関連

発表年 執筆者

対象者

1959	Whatley	アメリカ(Louisville)	関係なし
1974	Crocetti, Spiro et al.	アメリカ(Baltimore, UAW)	関係なし
1993	Brockington, Hall et al.	イギリス(Bromsgrove, Malvern)	関係なし
1996	Wolff, Pathare et al.	イギリス(Hern Hill, Steatham Hill)	関係なし
1973	藤本、小花和	看護婦、保健婦、公衆衛生職員	女性は拒否的、男性は受容的
1984	宗像	一般市民(東京都)	顕著な差はなし
1986	岡上、石原	一般市民(東京都)	顕著な差はなし
1989	大島、山崎他	病院周辺住民	男性は社会的距離が小さい(肯定的)
1997	東口、木場他	4年制私立大学文系学生	女子が男子より受け入れが悪い
1997	東口、森河	医学生	男子は女子より受容的態度に欠ける
2003	焼山、伊藤他	一般市民(北九州市近郊)	女性は社会的距離が大きい

資料 3

年代と精神障害者に対する意識・態度との関連

発表年	執筆者	対象者	
1951	Woodward	アメリカ(Louisville)	若いほど拒否が少ない
1957	Cumming ,Cumming	カナダ(Blackfoot)	若いほど拒否が少ない
1959	Whatley	アメリカ(Louisiana)	若い方が肯定的
1974	Crocetti,Spiro et al.	アメリカ(Baltimore,UAW)	高齢ほど受け入れ率低い
1993	Brockington,Hall et al.	イギリス(Bromsgrove,Malvern)	25才から44才は受容的
1996	Wolff,Pathare et al.	イギリス(Hern Hill,Steatham Hill)	年齢が高いほど拒否的
1962	加藤、中川他	看護婦,保健婦,公衆衛生職員	若いほど治療的態度
1968	進藤	一般市民(福島県)	低年齢は治療的態度
1973	藤本、小花和	看護婦,保健婦,公衆衛生職員	30代以上は拒否的
1984	宗像	一般市民(東京都)	年齢が高いほど拒否的
1986	岡上、石原	一般市民(東京都)	年齢が高いほど拒否的
1994	星越、州脇他	単科精神病院勤務者	若いほど好意的
1998	全家連	一般市民(全国)	高齢ほど社会的距離は減少
2002	谷口、森澤他	病院近接地域住民	高年代ほど拒否的
2003	焼山、伊藤他	一般市民(北九州市近郊)	高齢ほど近接関係は望まない

資料 4

学歴と精神障害者に対する意識・態度との関連

発表年	執筆者	対象者	
1948	Ramsey,Seipp	アメリカ(Trenton,N.J.)	高学歴は肯定的
1951	Woodward	アメリカ(Louisville)	高学歴は拒否が少ない
1957	Cumming ,Cumming	カナダ(Blackfoot)	高学歴は拒否が少ない
1959	Whatley	アメリカ(Louisville)	高学歴の方が肯定的
1967	Dohrenwend,Ching-Song	アメリカ(Washington Heights)	関係なし
1974	Crocetti,Spiro et al.	アメリカ(Baltimore,UAW)	低学歴ほど受け入れ少ない傾向
1993	Brockington,Hall et al.	イギリス(Bromsgrove,Malvern)	高学歴は肯定的
1993	Hall,Brockington et al.	イギリス(Bromsgrove,Malvern)	高学歴は肯定的
1996	Wolff,Pathare et al.	イギリス(Hern Hill,Steatham Hill)	高学歴は肯定的
1962	加藤、中川他	看護婦,保健婦,公衆衛生職員	高学歴は治療的態度
1968	進藤	一般市民(福島県)	高学歴は治療的態度
1973	藤本、小花和	主婦,一般成人男性,学生	低学歴は拒否的、高学歴は受容的
1984	宗像	一般市民(東京都)	低学歴は拒否的
1986	岡上、石原	一般市民(東京都)	低学歴は拒否的
1994	星越、州脇他	単科精神病院勤務者	高学歴の方が好意的
1998	全家連	一般市民(全国)	高学歴ほど社会的距離は小(肯定的)

資料 5

職業・収入と精神障害者に対する意識・態度との関連

発表年	執筆者	対象者	
1948	Ramsey, Seipp	アメリカ (Trenton, N.J.)	高い職業レベルは肯定的
1959	Whatley	アメリカ (Louisiana)	書記や専門的な職業の方が肯定的
1967	Dohrenwend, Ching-Song	アメリカ (Washington Heights)	高い職業レベルは高いトレランス
1993	Brockington, Hall et al.	イギリス (Bromsgrove, Malvern)	管理的な職業は最も受容的
1996	Wolff, Pathare et al.	イギリス (Hern Hill, Steatham Hill)	職業レベルは関係なし
1963	三浦、笠松他	銀行員、技術者、炭鉱夫 など6職種	銀行員、技術者は治療的 農業従事者、炭鉱夫は非治療的
1973	藤本、小花和	主婦、一般成人男性、学生	無職は拒否的、学生は受容的
1984	宗像	一般市民 (東京都)	労務職、主婦は悲観的
1986	岡上、石原	一般市民 (東京都)	労務職、主婦は悲観的
1989	大島、山崎他	病院周辺住民	パート、主婦は否定的
1998	全家連	一般市民 (全国)	学生、教育職、専門・技能職、労務職・ 技能職は消極度が低い
1959	Whatley	アメリカ (Louisiana)	収入が高い方が肯定的
1973	藤本、小花和	銀行員、技術者、炭鉱夫	収入が10万以下は受容的
1998	全家連	一般市民 (全国)	中位は社会的距離が小さい (肯定的)

資料 6

知識と精神障害者に対する意識・態度との関連

発表年	執筆者	対象者	
1960	Freeman, Kassebaum	アメリカ (Washington)	知識はほとんど影響しない
1989	大島、山崎他	病院周辺住民	知識があると社会的距離は小 (肯定的)
1996	坂本、丹野	大学生	事件報道から情報を得た人はイメージ悪い
1998	坂本、杉浦他	大学生	事件報道から情報を得た人はイメージ悪い
2004	田中	一般市民 (N県)	誰もが病気になる可能性認識は肯定的に

資料 7

接触体験と精神障害者に対する意識・態度との関連

発表年	執筆者	対象者	
1959	Whatley	アメリカ(Louisiana)	関係なし
1993	Brockington, Hall et al.	イギリス(Bromsgrove, Malvern)	接触があるとトランス高くなる(受容的)
1994	Penn, Guynan et al.	アメリカ・大学生	接触があると危険性が少ないと認知
1996	Wolff, Pathare et al.	イギリス(Hern Hill, Steatham Hill)	知り合いは関係あるが直接の関係なし
1996	Ymamoto, Randall et al.	日本とタイ	期間や質による
1984	宗像	一般市民(東京都)	接触があると受容的
1986	岡上、石原	一般市民(東京都)	接触があると受容的
1989	大島、山崎他	病院周辺住民	接触があるほど社会的距離小
1992	大島	一般市民(東京都)	主体的な接触で社会的距離は減少
		一般市民(東京都)	外的条件による接触体験では関連なし
1992	大島、上田他	一般市民(G県X市)	主体的な接触で社会的距離は減少するが、 外的条件による接触体験では関連なし
1994	星越、州脇他	単科精神病院勤務者	患者との接触が拒否的感情につながる
1996	坂本、丹野	大学生	病院を訪れた人はネガティブイメージ少ない
1997	與古田、与那嶺他	一般市民(沖縄県)	接触経験や接触密度の違いが影響
1998	全家連	一般市民(全国)	接触があると消極度低下
1998	坂本、杉浦他	大学生	病院を訪れた人はネガティブイメージ少ない
1999	蓮井、坂本他	大学生	接触体験は肯定的態度
2002	岡本、阿部他	精神看護実習生女子	実習後に肯定的に変化
2002	中村、川野	女子大生	外的条件による接触体験では関連なし
2003	矢島、梅林他	一般市民(群馬県北部)	接触体験ない人は精神障害者と共に社会 生活を送ることを「わからない」と答える
2004	田中	一般市民(N県)	ふれあう体験は肯定的だが、表面的な 接触体験は否定的に

2 章 精神障害に関するイベントにおける実態調査（調査 1）

偏見態度の変容のために方法として、Allport (1961) は「法的是正、正規教育上の諸方法、接触と知り合い、集団再教育、マス・メディア、勧告、個人治療」をあげている。また、非好意的な社会の態度は無知のための偏見であることが多いといわれ (Allport:1961, Stephan, Stephan:1984)、精神疾患を“異常”と感じる人ほど偏見が高いということが報告されている (坂本他:1996)。このため、正しい知識の普及が必要だと考えられるが、正しい知識の普及を行うことで自動的に偏見が変わるとはいえない。しかし、長い目で見れば役立つと Allport (1961) は述べている。

国内においては、精神障害者に対する偏見除去のために偏見除去プログラム (西尾:2003) の研究がなされているが、地域では今までにも偏見除去のための取り組みとして、知識の普及のために市民講座やイベントなどが行われ、また、施設や病院の祭りやバザーなどにおいて接触体験の機会を作ってきた。しかし、参加者は関係者や家族が多く、精神障害に関する知識をもたない一般市民の参加は少ないという声をよく耳にする。市民講座やイベントなどにおいてアンケートを行うことはあるが、参加者の属性を把握していることは少ないようである。

そこで、イベントにおける参加者の実態を把握するためにアンケート調査を実施した。

1. 調査方法

(1) 対象者

K 大学において行われた「こころの健康と福祉を考えるつどい」の参加者を対象にアンケート調査を行った。

(2) 実施日

実施は 2005 年 11 月 23 日である。また、イベント終了後に出口で回収を行い、有効票数は 283 票である。

(3) 調査内容

内容は性別、年齢、既婚未婚、子どもの人数、イベント関係者（開催大学職員・学生、精神障害者に関わる施設、行政職員など）か否か、地域での役割、身近に精神障害者がいるかどうか、そして、事例をもとに精神障害者に対する受け入れ意識を問う項目である。

受け入れ程度に関しては、大島ら (大島, 山崎他:1989, 大島, 中村他:1988, 大島:1992) の、安定はしているが後遺症状のある統合失調症の A さんの事例をあげ「隣に単身で越してくる」場合どの程度受け入れるかを問い、「困っている時

はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」「あまりかわらないようにする」「他の場所に住むように働きかける」「その他」を選択肢とした。本調査において「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」と答えた人は精神障害者の地域生活に肯定的であると考え、精神障害者の支援者と位置づけている。

また、質問項目数は回答者に負担のないように全 12 問とし、B4 用紙 1 枚を用いた無記名自己記入式質問紙による集合調査とした（資料 1）。

（４）分析方法

分析はフィッシャー正確確率検定を用いて比較を行った。

２．結果

（１）属性

年齢では 60 代がもっとも多く、81 人であり、平均年齢は 50.37 才、標準偏差は 19.08 である（表 1）。

表 1 性別と年代

	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		無回答		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
男	2	40.0	21	33.3	6	42.9	7	30.4	12	29.3	23	28.4	18	46.2	1	50.0	3	20.0	93	32.9
女	3	60.0	42	66.7	8	57.1	16	69.6	29	70.7	57	70.4	21	53.8	1	50.0	12	80.0	189	66.8
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0

表 2 関係者か・精神障害者が身近にいるか

	精神障害者が 身近にいる	精神障害者が 身近にいない	無回答	合計
関係者	24	48	2	74
非関係者	57	125	16	198
無回答	4	5	2	11
全体	85	178	20	283

関係者は 74 人、身近に精神障害者がいる人は 85 人、このうち関係者でかつ身近に精神障害者がいる人は 24 人、非関係者であり身近に精神障害者がいない人は 125 人であった（表 2）。

表 3 地域活動について

	人	%
地域活動を行っている	187	66.1
地域活動を行っていない	89	31.4
無回答	7	2.5
全体	283	100.0

表 4 地域活動の内容

[複数回答]	人	%
自治会	34	18.2
民生委員	16	8.6
地区福祉委員	100	53.5
ボランティア	94	50.3
婦人会	14	7.5
その他	21	11.2
無回答	2	1.1
全体	187	100.0

また、地域でなんらかの活動を行っている人は 187 人であり、そのうち、自治会役員は 34 人、民生委員 16 人、地区福祉委員 100 人、ボランティア 94 人、婦人会 14 人、その他 21 人であった（複数回答）（表 3、4）。非関係者や非地域活動者でかつ、精神障害者が身近にいない人は 20 人であった。

（２） 精神障害者に対する受け入れ意識

表 5 受け入れ意識

	人	%	
できるだけ手を貸す	101	35.7	困っている時はできるだけ手を貸す」と答えた人は全体のうち 101 人(36%)、「他の人と同じような近所付き合いをする」153 人(54%)、「あまりかかわらないようにする」9 人(3%)、「その他」3 人(1%)、無回答 5 人(2%)であり、「他の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった（表 5）。ほとんどの人が肯定的な意識であり、予想された結果であった。
他の人と同じような近所付き合い	153	54.1	
あまりかかわらない	9	3.2	
他の場所に住むように働きかけ	0	0.0	
その他	15	5.3	
無回答	5	1.8	
全体	283	100.0	

の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった（表 5）。ほとんどの人が肯定的な意識であり、予想された結果であった。

（３） 受け入れ意識の比較

＜関係者かつ身近に精神障害者がいる人と、非関係者かつ身近に精神障害者がいない人との比較＞

関係者でかつ身近に精神障害者がいる人は 24 人あり、「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」と答えた人は 22 人であり、「あまりかかわらないようにする」「他の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった。

非関係者であり身近に精神障害者がいない人 125 人のうち無回答を除き、「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」と答えた人は 114 人(96%)、「あまりかかわらないようにする」3 人(3%)、「その他」2 人(2%)であり、「他の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった。

表 6 受け入れ意識の比較

	関係者かつ、精神障害者が身近にいる		非関係者かつ、精神障害者が身近にいない		「手を貸す」「同じつきあい」×「関わらない」
	人	%	人	%	
手を貸す	6	27.3	49	41.2	P=0.59
同じつきあい	16	72.7	65	54.6	
関わらない	0	0.0	3	2.5	
その他	0	0.0	2	1.7	
全体	22	100.0	119	100.0	

Fisher's test [無回答、その他を除く]

「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合

「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」と答えた人を肯定的、また、「あまりかかわらないようにする」「他の場所に住むように働きかける」と答えた人を否定的とし、関係者でかつ身近に精神障害者がいる人と、非関係者でかつ身近に精神障害者がいない人の受け入れ意識を比較した結果、有意差は見出されなかった(表 6)。

(4) 受け入れ程度の比較

非関係者かつ非地域活動者かつ身近に精神障害者がいない 20 人は「困っている時はできるだけ手を貸す」(20%)、「他の人と同じような近所付き合いをする」(80%) のいずれかに答えており、全員肯定的であった。また、関係者、地域活動者あるいは身近に精神障害者がいる人は「困っている時はできるだけ手を貸す」が 39%、「他の人と同じような近所付き合いをする」が 54%であり、非関係者かつ非地域活動者かつ身近に精神障害者がいない人と比較して積極的に支援しようとする意識をもつ人の割合が多い(表 7)。

表 7 受け入れ程度の比較 (1)

	非関係者 かつ 非地域活動者かつ 身近にいない		関係者 又は 地域活動者又は 身近にいる		「手を貸す」× 「同じ付き合い」
	人	%	人	%	
手を貸す	4	20.0	89	39.2	P=0.04
同じ付き合い	16	80.0	122	53.7	
関わらない	0	0.0	6	2.6	
その他	0	0.0	10	4.4	
全体	20	100.0	227	100.0	

Fisher's test [無回答、その他を除く]

そこで、非関係者かつ非地域活動者かつ身近に精神障害者がいない人と、地域活動の種別における受け入れ程度を比較した結果、自治会役員、民生委員、地区福祉委員では有意に積極的であった。

しかし、ボランティア、婦人会活動を行っている人において、有意差は見られなかった(表 8)。

表 8 受け入れ程度の比較 (2)

	非関係者かつ 非地域活動者かつ 身近にいない		自治会役員		民生委員		地区福祉 委員		ボランティア		婦人会		「手を貸す」× 「同じ付き合い」	
	①		②		③		④		⑤		⑥			
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%		
手を貸す	4	20.0	17	56.7	10	71.4	46	50.5	32	36.8	3	25.0	①×②	P=0.01
同じ付き合い	16	80.0	12	40.0	4	28.6	43	47.3	51	58.6	9	75.0	①×③	P=0.00
関わらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.2	2	2.3	0	0.0	①×④	P=0.01
その他	0	0.0	1	3.3	0	0.0	0	0.0	2	2.3	0	0.0	①×⑤	P=0.09
全体	20	100.0	30	100.0	14	100.0	91	100.0	87	100.0	12	100.0	①×⑥	P=0.53

Fisher's test [無回答、その他を除く]

3. 考察

本調査において得られた結果は、本イベントが行われた地域に限定される可能性は否定できないが、イベントに参加する人たちは精神障害者に対して肯定的であるという結果は予想できるものであった。

また、肯定的な中でも、自治会役員、民生委員、地区福祉委員が精神障害者に対して受け入れに積極的であることが示唆された。このため、市民講座やイベント開催時にはこれらの地域活動者に広報活動を行うことにより、効果的な知識の普及が望める可能性があり、また、参加者に接触体験の機会を提供することにより偏見除去につながるとともに、地域における積極的な支援者となる可能性があるだろう。

全家連（1998）の調査において「誰でも精神障害になる可能性がある」と答えた人は51.7%であった。しかし、本イベントでは、精神障害に関する知識を持たないと考えられる参加者は全体の7%にすぎなかった。精神障害の認識は広がりつつあるようには見えるが、いつ自分も精神障害になるかわからないという認識を持ち、自分の問題としてとらえている人は必ずしも多いとはいえず、イベントなどに参加をして知識を得ておこうとするまでには、なかなか至らないのが現状のようである。

このようなことから、知識普及には、わざわざ足を運ばなくても知識を得られるような方法を考えていく必要があるだろう。

文 献

- Allport, G. W. The nature of prejudice. Addison-Wesley, 1961. オルポート 原谷道夫, 野村昭訳『偏見の心理』培風館 1969
- 中村真, 川野健治「精神障害者に対する偏見に関する研究—女子大学生を対象にした実態調査をもとに—」川村学園女子大学研究紀要 13(1), 2002, 137-149
- 西尾雅明 分担研究報告書「統合失調症に対する偏見除去の方法に関する研究」佐藤光源, 原田憲一, 西尾雅, 千葉潜『精神障害者の偏見除去等に関する研究』厚生労働科学研究費補助金 障害保健福祉総合研究事業 2003
- 大島巖「精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度 —尺度の妥当性を中心に—」精神保健研究 4 (通巻 38) 1992, 25-37
- 大島巖, 中村佐織, 山崎喜比古, 小沢温, 三田優子, 園田恭一「障害者を包み込んだ保健と福祉のコミュニティづくりに関する調査研究 —福祉施設や精神病院の社会化・開放化と周辺住民の受け入れ姿勢—」『保健と福祉のコミュニティづくりに関する研究』昭和 61 年度文部省科学研究報告書 (園田恭一代表) 1988, 109-237
- 大島巖, 山崎喜比古, 中村佐織, 小沢温「日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観」社会精神医学 12(3), 1989, 286-297
- 坂本真士丹野義彦「精神疾患への偏見の形成に与る要因の検討 (I) —精神疾患の“異常さ”の認知について」日本心理学会第 60 回大会論文集 1996, 205
- Stephan, W. G., Stephan, C. W. Intergroup anxiety. Journal of Social Issues, 41, 1985, 157-175
- 全国精神障害者家族会連合会『精神障害者観の現状' 97』ぜんかれん保健福祉研究所モノグラフ 22, 1998

アンケート

関西福祉科学大学大学院で精神障害について学んでいる御前由美子と申します。
精神障害者の地域生活支援の研究のために、以下のアンケートにぜひご協力いただけますようお願いいたします。
なお、無記名で統計的に処理されますので、みなさまご迷惑をおかけすることは一切ございません。

- [1] 性別 ☐ 男 ☐ 女
- [2] 年齢 ()才
- [3] ご結婚なさっていますか？
☐ はい ☐ いいえ
- [4] お子さんはいらっしゃいますか？
☐ はい → あてはまるものに印をつけて下さい ☐ 1人 ☐ 2人 ☐ 3人以上
☐ いいえ
- [5] 本学の在学学生・卒業生もしくは関係者ですか？
☐ はい ☐ いいえ
- [6] 次のような役割や活動を行っていますか？
☐ はい → あてはまるものすべてに印をつけて下さい ☐ 自治会役員(町会役員) ☐ 民生児童委員 ☐ 地区福祉委員
☐ いいえ ☐ ボランティア ☐ 婦人会活動 ☐ その他()
- [7] 動物が好きですか？
☐ はい → あてはまるものすべてに印をつけて下さい ☐ 犬 ☐ ねこ ☐ 魚類 ☐ 鳥類
☐ いいえ ☐ うさぎ ☐ は虫類 ☐ ねずみ類 ☐ 昆虫類
☐ さる類 ☐ 猛獣類 ☐ その他()
- [8] 動物を飼ったことがありますか？
☐ はい → あてはまるものすべてに印をつけて下さい ☐ 犬 ☐ ねこ ☐ 魚類 ☐ 鳥類
☐ いいえ ☐ うさぎ ☐ は虫類 ☐ ねずみ類 ☐ 昆虫類
☐ さる類 ☐ 猛獣類 ☐ その他()
- [9] 現在、動物を飼っていますか？
☐ はい → あてはまるものすべてに印をつけて下さい ☐ 犬 ☐ ねこ ☐ 魚類 ☐ 鳥類
☐ いいえ ☐ うさぎ ☐ は虫類 ☐ ねずみ類 ☐ 昆虫類
☐ さる類 ☐ 猛獣類 ☐ その他()

資料 1 つづき

[10] 身近に精神障害者がいますか？

☐ はい ☐ いいえ

次の事例を読んで、お答えください。

☆☆☆☆☆☆☆☆

統合失調症で精神病院に入院したことのあるAさん(35才、男性、独身)は、病気がよくなったので、主治医の勧めでアパートを借りて生活しようと考え、何軒かの大家さんに当たりましたが、すべて断られてしまいました。たしかにAさんには、気力が続かず、長時間の勤めには出られぬ後遺症が残っていますし、多少、キレやすいところもあります。

しかし、短時間の軽作業をするために同じ病気の患者さん達が通う作業所には、毎日行くことができます。それに人柄はまじめですし、買い物や炊事なども一般の人と同じようにできるのです。

アパート入居を断られてAさんは、精神病院に入院していたら入居できないのは本当にイヤしいと思つたそうです。

☆☆☆☆☆☆☆☆

[11] あなたのとなりにAさんが引っ越してきた場合、どのような近所付き合いをしますか？

もっとも近いものを1つだけ選んで下さい。☐ 困っている時はできるだけ手を貸す

☐ 他の人と同じような近所付き合いをする

☐ あまりかかわらないようにする

☐ 他の場所に住むように働きかける

☐ その他(具体的に

)

[12] 引っ越してきたAさんが動物好きだった場合、どのような近所付き合いをしますか？

もっとも近いものを1つだけ選んで下さい。☐ 困っている時はできるだけ手を貸す

☐ 他の人と同じような近所付き合いをする

☐ あまりかかわらないようにする

☐ 他の場所に住むように働きかける

☐ その他(具体的に

)

ご協力ありがとうございました

基礎集計 年齢別 N=283

		10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上無回答				全体	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
[1]	男	2	40.0	21	33.3	6	42.9	7	30.4	12	29.3	23	28.4	18	46.2	1	50.0	3	20.0	93	32.9
	女	3	60.0	42	66.7	8	57.1	16	69.6	29	70.7	57	70.4	21	53.8	1	50.0	12	80.0	189	66.8
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
[3]	既婚	0	0.0	0	0.0	4	28.6	12	52.2	34	82.9	78	96.3	36	92.3	2	100.0	15	100.0	181	64.0
	未婚	5	100.0	63	100.0	10	71.4	11	47.8	6	14.6	1	1.2	2	5.1	0	0.0	0	0.0	98	34.6
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.4	2	2.5	1	2.6	0	0.0	0	0.0	4	1.4
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
[4]	子どもあり	0	0.0	0	0.0	3	21.4	11	47.8	32	78.0	77	95.1	36	92.3	2	100.0	13	86.7	174	61.5
	子どもなし	5	100.0	61	96.8	11	78.6	12	52.2	9	22.0	3	3.7	3	7.7	0	0.0	1	6.7	105	37.1
	無回答	0	0.0	2	3.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0	1	6.7	4	1.4
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
人数	1人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	18.2	2	6.3	3	3.9	4	11.1	0	0.0	2	15.4	13	7.5
	2人	0	0.0	0	0.0	2	66.7	7	63.6	23	71.9	56	72.7	26	72.2	1	50.0	7	53.8	122	70.1
	3人以上	0	0.0	0	0.0	1	33.3	2	18.2	7	21.9	16	20.8	6	16.7	1	50.0	4	30.8	37	21.3
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	1.1
	全体	0	0.0	0	0.0	3	100.0	11	100.0	32	100.0	77	100.0	36	100.0	2	100.0	13	100.0	174	100.0
[5]	関係者	2	40.0	55	87.3	4	28.6	2	8.7	1	2.4	7	8.6	2	5.1	0	0.0	1	6.7	74	26.1
	非関係者	3	60.0	8	12.7	9	64.3	21	91.3	39	95.1	71	87.7	34	87.2	1	50.0	12	80.0	198	70.0
	無回答	0	0.0	0	0.0	1	7.1	0	0.0	1	2.4	3	3.7	3	7.7	1	50.0	2	13.3	11	3.9
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
[6]	役割あり	0	0.0	21	33.3	5	35.7	9	39.1	31	75.6	71	87.7	34	87.2	2	100.0	14	93.3	187	66.1
	役割なし	5	100.0	42	66.7	9	64.3	13	56.5	9	22.0	7	8.6	3	7.7	0	0.0	1	6.7	89	31.4
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.3	1	2.4	3	3.7	2	5.1	0	0.0	0	0.0	7	2.5
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
役割	〔複数回答〕																				
	自治会	0	0.0	0	0.0	2	40.0	1	11.1	3	9.7	17	23.9	9	26.5	1	50.0	1	7.1	34	18.2
	民生委員	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	6.5	5	7.0	7	20.6	0	0.0	2	14.3	16	8.6
	地区福祉委員	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	22.2	16	51.6	52	73.2	18	52.9	2	100.0	10	71.4	100	53.5
	ボランティア	0	0.0	19	90.5	3	60.0	3	33.3	16	51.6	29	40.8	16	47.1	2	100.0	6	42.9	94	50.3
	婦人会	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	12.9	4	5.6	3	8.8	1	50.0	2	14.3	14	7.5
	その他	0	0.0	1	4.8	1	20.0	4	44.4	0	0.0	9	12.7	6	17.6	0	0.0	0	0.0	21	11.2
	無回答	0	0.0	1	4.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.9	0	0.0	0	0.0	2	1.1
	全体	0	0.0	21	100.0	5	100.0	9	100.0	31	100.0	71	100.0	34	100.0	2	100.0	14	100.0	187	100.0
[7]	動物好き	5	100.0	60	95.2	12	85.7	17	73.9	33	80.5	62	76.5	25	64.1	0	0.0	13	86.7	227	80.2
	嫌い	0	0.0	2	3.2	2	14.3	6	26.1	6	14.6	17	21.0	12	30.8	1	50.0	1	6.7	47	16.6
	無回答	0	0.0	1	1.6	0	0.0	0	0.0	2	4.9	2	2.5	2	5.1	1	50.0	1	6.7	9	3.2
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
種類	〔複数回答〕																				
	犬	4	80.0	54	85.7	8	66.7	16	94.1	24	72.7	50	80.6	21	84.0	0	0.0	12	92.3	189	83.3
	ねこ	3	60.0	33	52.4	9	75.0	10	58.8	15	45.5	22	35.5	9	36.0	0	0.0	5	38.5	106	46.7
	魚類	2	40.0	16	25.4	2	16.7	4	23.5	8	24.2	24	38.7	10	40.0	0	0.0	5	38.5	71	31.3
	鳥類	3	60.0	16	25.4	3	25.0	3	17.6	4	12.1	18	29.0	7	28.0	0	0.0	4	30.8	58	25.6
	うさぎ	2	40.0	28	44.4	5	41.7	5	29.4	6	18.2	13	21.0	2	8.0	0	0.0	3	23.1	64	28.2
	は虫類	1	20.0	8	12.7	0	0.0	2	11.8	0	0.0	0	0.0	1	4.0	0	0.0	0	0.0	12	5.3
	ねずみ類	1	20.0	14	22.2	1	8.3	2	11.8	1	3.0	1	1.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	20	8.8
	昆虫類	1	20.0	6	9.5	0	0.0	1	5.9	2	6.1	7	11.3	3	12.0	0	0.0	1	7.7	21	9.3
	さる類	1	20.0	13	20.6	5	41.7	0	0.0	1	3.0	4	6.5	0	0.0	0	0.0	1	7.7	25	11.0
	猛獣類	0	0.0	8	12.7	0	0.0	1	5.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	9	4.0
	その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	全体	5	100.0	63	100.0	12	100.0	17	100.0	61	100.0	62	100.0	25	100.0	0	0.0	13	100.0	227	100.0

資料 2 つづき

[8]	飼育経験あり	5	100.0	54	85.7	13	92.9	22	95.7	39	95.1	69	85.2	30	76.9	0	0.0	14	93.3	246	86.9
	飼育経験なし	0	0.0	9	14.3	1	7.1	1	4.3	2	4.9	12	14.8	8	20.5	1	50.0	0	0.0	34	12.0
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.6	1	50.0	1	6.7	3	1.1
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
種類 [複数回答]																					
	犬	3	60.0	33	61.1	4	30.8	19	86.4	29	74.4	57	82.6	26	86.7	0	0.0	10	71.4	181	73.6
	ねこ	2	40.0	12	22.2	4	30.8	8	36.4	19	48.7	20	29.0	9	30.0	0	0.0	5	35.7	79	32.1
	魚類	2	40.0	36	66.7	7	53.8	6	27.3	16	41.0	26	37.7	11	36.7	0	0.0	8	57.1	112	45.5
	鳥類	2	40.0	11	20.4	7	53.8	7	31.8	17	43.6	27	39.1	12	40.0	0	0.0	8	57.1	91	37.0
	うさぎ	0	0.0	6	11.1	5	38.5	1	4.5	10	25.6	17	24.6	6	20.0	0	0.0	2	14.3	47	19.1
	は虫類	0	0.0	8	14.8	1	7.7	3	13.6	1	2.6	0	0.0	1	3.3	0	0.0	0	0.0	14	5.7
	ねずみ類	2	40.0	12	22.2	5	38.5	5	22.7	6	15.4	2	2.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	32	13.0
	昆虫類	3	60.0	16	29.6	2	15.4	7	31.8	9	23.1	14	20.3	4	13.3	0	0.0	3	21.4	58	23.6
	さる類	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
	猛獣類	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	0	0.0	4	7.4	0	0.0	0	0.0	1	2.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	7.1	6	2.4
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.4	1	3.3	0	0.0	0	0.0	2	0.8
	全体	5	100.0	54	100.0	13	100.0	22	100.0	108	100.0	69	100.0	30	100.0	0	0.0	14	100.0	246	100.0
[9]	現在飼育	2	40.0	32	50.8	5	35.7	10	43.5	18	43.9	31	38.3	12	30.8	0	0.0	6	40.0	116	41.0
	現在非飼育	3	60.0	30	47.6	9	64.3	13	56.5	23	56.1	48	59.3	24	61.5	1	50.0	7	46.7	158	55.8
	無回答	0	0.0	1	1.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.5	3	7.7	1	50.0	2	13.3	9	3.2
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
種類 [複数回答]																					
	犬	1	50.0	22	68.8	1	20.0	6	60.0	9	50.0	13	41.9	6	50.0	0	0.0	3	50.0	61	52.6
	ねこ	1	50.0	7	21.9	3	60.0	3	30.0	6	33.3	9	29.0	3	25.0	0	0.0	0	0.0	32	27.6
	魚類	0	0.0	6	18.8	1	20.0	0	0.0	4	22.2	10	32.3	4	33.3	0	0.0	4	66.7	29	25.0
	鳥類	0	0.0	1	3.1	0	0.0	0	0.0	1	5.6	2	6.5	1	8.3	0	0.0	1	16.7	6	5.2
	うさぎ	0	0.0	1	3.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.9
	は虫類	0	0.0	1	3.1	0	0.0	0	0.0	1	5.6	0	0.0	1	8.3	0	0.0	0	0.0	3	2.6
	ねずみ類	0	0.0	2	6.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	6.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	3.4
	昆虫類	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	10.0	1	5.6	3	9.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	4.3
	さる類	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	猛獣類	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	5.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.9
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	全体	2	100.0	32	100.0	5	100.0	10	100.0	23	100.0	31	100.0	12	100.0	0	0.0	6	100.0	116	100.0
[10]	身近にいる	1	20.0	23	36.5	9	64.3	13	56.5	15	36.6	15	18.5	8	20.5	0	0.0	1	6.7	85	30.0
	身近にいない	4	80.0	38	60.3	4	28.6	10	43.5	22	53.7	60	74.1	27	69.2	1	50.0	12	80.0	178	62.9
	無回答	0	0.0	2	3.2	1	7.1	0	0.0	4	9.8	6	7.4	4	10.3	1	50.0	2	13.3	20	7.1
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
[11]	となりにAさんが引越し																				
	手を貸す	1	20.0	17	27.0	5	35.7	8	34.8	14	34.1	30	37.0	19	48.7	1	50.0	6	40.0	101	35.7
	他の人と同じ	4	80.0	43	68.3	8	57.1	14	60.9	24	58.5	41	50.6	13	33.3	0	0.0	6	40.0	153	54.1
	関わらない	0	0.0	2	3.2	1	7.1	0	0.0	2	4.9	2	2.5	2	5.1	0	0.0	0	0.0	9	3.2
	他の場所へ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	0	0.0	1	1.6	0	0.0	1	4.3	1	2.4	5	6.2	4	10.3	1	50.0	2	13.3	15	5.3
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	3.7	1	2.6	0	0.0	1	6.7	5	1.8
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0
[12]	Aさんが動物好き																				
	手を貸す	1	20.0	16	25.4	7	50.0	7	30.4	16	39.0	21	25.9	13	33.3	1	50.0	5	33.3	87	30.7
	他の人と同じ	4	80.0	45	71.4	6	42.9	13	56.5	21	51.2	45	55.6	17	43.6	0	0.0	7	46.7	158	55.8
	関わらない	0	0.0	1	1.6	0	0.0	0	0.0	4	9.8	3	3.7	3	7.7	0	0.0	0	0.0	11	3.9
	他の場所へ	0	0.0	0	0.0	1	7.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
	その他	0	0.0	1	1.6	0	0.0	2	8.7	0	0.0	7	8.6	3	7.7	0	0.0	2	13.3	15	5.3
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	4.3	0	0.0	5	6.2	3	7.7	1	50.0	1	6.7	11	3.9
	全体	5	100.0	63	100.0	14	100.0	23	100.0	41	100.0	81	100.0	39	100.0	2	100.0	15	100.0	283	100.0

3 章 精神障害者の地域生活支援者を拡充するためのモデル

1. 偏見除去の現状

これまで行われてきた偏見除去の方法は、知識を提供することで理解が得られ、接触体験によりさらに偏見が軽減され、精神障害者に対する受け入れが促進されるというように、精神障害者の地域生活を支える積極的な支援者となる可能性が高くなることを期待しているものである。精神保健ボランティア講座などでは、ボランティア希望者は精神障害に関する講義を受講した後、精神障害者との交流を持ち理解を深めるという方法がとられている場合が多いようである。これを表したものが図1である。

図1 偏見除去の方法

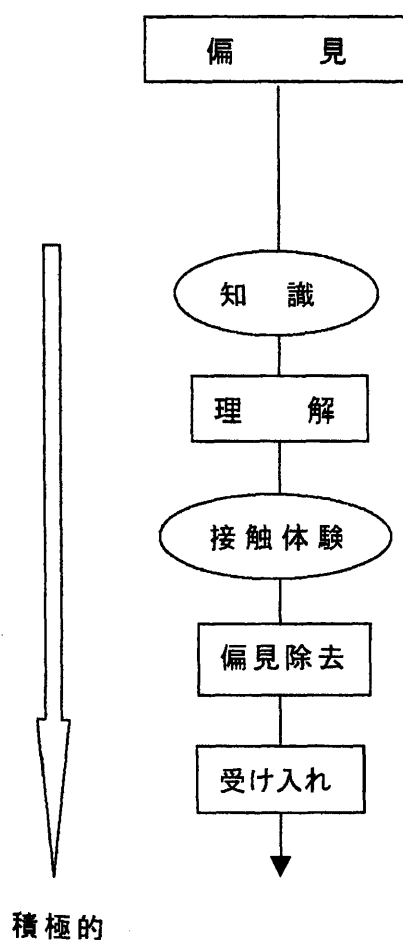
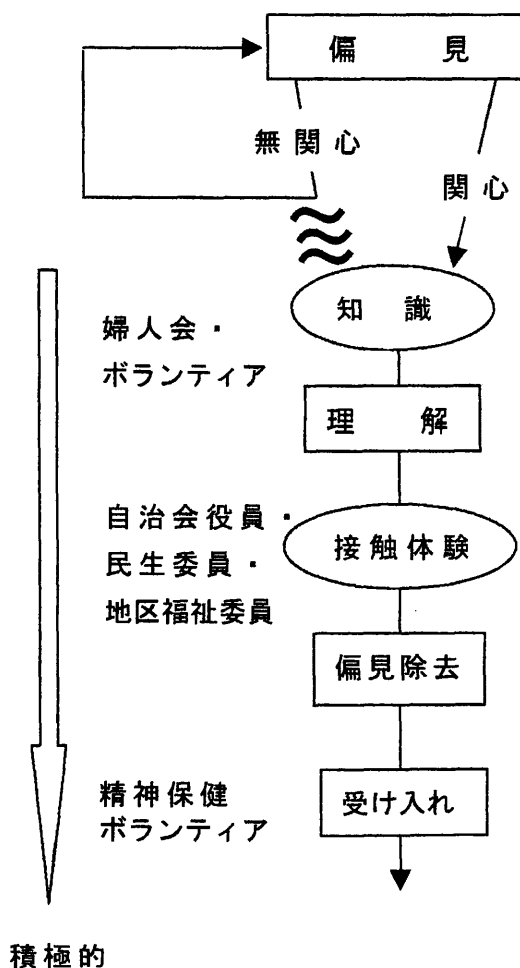


図2 偏見除去の現状



しかし、現実には図1のようにスムーズに進んでいるとは限らず、先述のイベントにおける調査でも、参加した人は肯定的であったが、精神障害に関する知

識を持たないであろうと考えられる人は全体の7%にすぎなかった。

精神障害者と共に社会生活を送ることについてたずねた場合、「わからない」という回答が多く、「精神障害者の問題を身近な問題として考える機会が少ないことの影響が伺われた」（矢島他：2003）という指摘がされている。また、小澤は、精神障害者施設建設時等にしばしば起こる反対運動においても、1割程度の熱心な反対者を除いた残りの9割は無関係、無関心であると述べている。このような、精神障害は所詮ひとごとだと考える「無関心」が一般市民のイベント参加を少なくしている大きな要因の1つと考えられる。自分もいつこの病気にかかるかもしれないという意識がないために、わざわざ足を運んでまで知識を得ようとはせず、精神障害に対する正しい知識を得るにはなかなか至らないようである。

しかし、「精神障害者に関するマスコミ報道に関心をもって見聞する」という積極的・能動的な関心の高さが精神障害者に対する否定的な態度を改善するという報告（中村：2002）もあることから、非関係者や非地域活動者であっても精神障害に関心を持つ人、あるいは身近に精神障害者はいないのだが精神障害に関心をもっている人は知識を得る機会を通じ、積極的な方向に進んでいく可能性を持っていると考えられる。この現状を示したものが図2である。

また、先述のイベントにおける調査では、自治会役員、民生委員、地区福祉委員などの地域活動者は、婦人会、ボランティアよりも精神障害者を積極的に受け入れる傾向にあり、さらに、民生委員より精神保健ボランティアの方が精神障害者に対する意識が高いという報告（澤本、桑原他：1996）があることから、精神保健ボランティアは最も積極的地域生活支援者であると考えられる。このため図2においては、婦人会、ボランティアそして、自治会役員、民生委員、地区福祉委員、さらに精神保健ボランティアというように積極的な位置に配置した。

2. 多角的アプローチ

厚生労働省は「入院医療から地域生活中心へ」という方策のためには、まず、精神疾患を自分の問題として考える人を増やし、精神障害者に対して受容的な態度に変化させる必要があると考えた。そこで、「精神保健福祉の改革ビジョン」では、「精神疾患は生活習慣病と同じく誰もがかかりうる病気であることについての認知度を90%以上とする」ことを目標に掲げている。

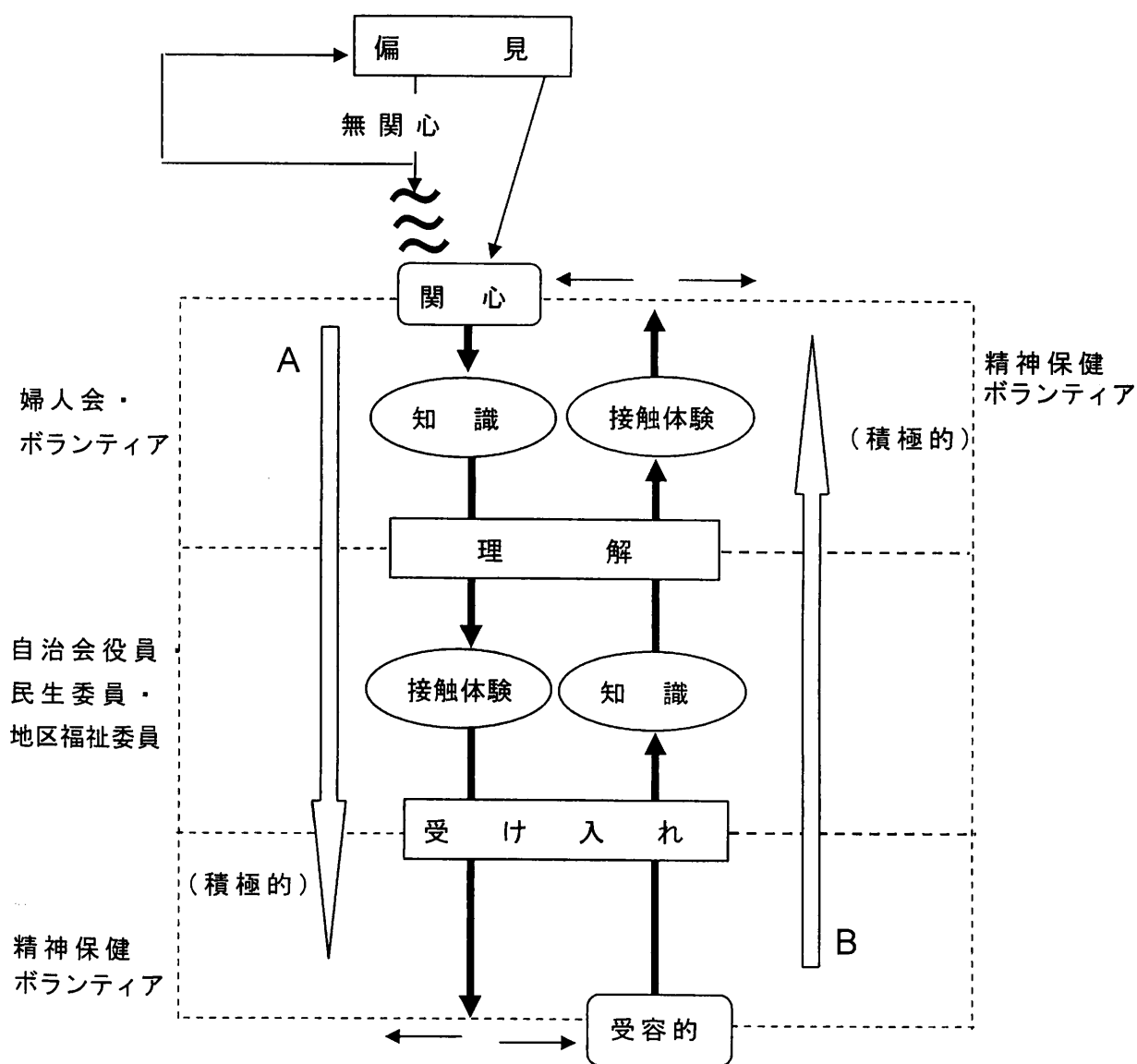
しかし、イベントなどに足を運んで知識を得ようとする人が少ないことから、従来行われてきた方法だけでは知識が普及されにくいと考えられる。また、従来行われてきたキャンペーンにおける効果では限界がある（Thompson, Stuart et al. :2002）という指摘もされている。

そこで、偏見を除去するためには「できるかぎり、多角的なアプローチが必要」（Allport:1961）とされることから、精神障害者の場合においても従来行われている方向からのアプローチに加えて、異なる方向からのアプローチも考

えてみることにした。

偏見を持つ人は知識を得なければ精神障害者を受け入れることは難しいかもしれない。しかし、「All-Weather Liberal」(Merton:1976)な人や「寛容な人」(Allport:1961)は元来偏見を持つことが少なく、このような人は知識が無くても精神障害者に対して受容的な可能性があるだろう。受容的な人に直接働きかけることにより精神障害者を受け入れる地域住民を増やせるのではないかと考え、1つのモデルとして図3に示した。

図3 精神障害者の地域生活支援のためのモデル



このモデルは図2の流れに、受容的な人が積極的な支援者となる可能性をもつというB方向の流れを加えたものである。この流れは、受容的な人が知識を得て理解を深め、より受容的になる可能性があり、さらに、接触体験を通してより積極的な支援者となる可能性が生まれることを期待している。積極的にな

ることさらに関心が高まり、一層知識を得ようとすることもあるだろうし、受容的になることもあるかもしれないという流れである。一方、偏見を持つ人の中でも、誰でも精神障害になる可能性があると考え、精神障害に関心を持つ人は従来行われてきたような方法で知識を得る機会があるだろう。そして理解をすることで、精神障害者に対する拒否的な態度は軽減されるだろう。さらに、接触体験により積極的な支援者となる可能性が生まれる。積極的になることにより、一層受容的になることもあるだろうし、関心がより一層高まることもあるだろう。

このように、従来の方法とは異なる角度からの受容的な人に働きかけるというアプローチを加えることにより、少しでも多くの人から理解を得られることに役立つと考えている。そして、理解者が増えることは支援者を増やすことにもつながるのではないかと期待している。

3. 共感性と援助行動

先述の「受容的」な人とはどのような人かを考えてみたい。

蓮井ら(1999)は「ある集団に対して積極的関心、受容、共感、権利の保護などの態度は肯定的態度であり、偏見をもたないものと考えられる」と述べている。また、Allport(1961)は「いかなるひとに対しても友好心をもって当たるひとを寛容なひと」とよび、さらに、このような人は温和なトレランスを持っており、トレランスの一重要要因として共感能力をあげている。

共感とは社会心理学用語辞典において、「他者の情動状態や情動反応を近くし、その人の情動状態を共有することを指す」(小川:1995)とされている。また、伊藤(1996)は「個人(共感者)が他者の考え、感情、行為などを認知することにより、その他者と同様の感情状態を体験したり、他者の観点から外界を認知したりすること」と定義し、Eisenbergら(1989)は「相手の情動あるいは条件から生じ、その状態や条件に伴ってこちら側に起きる代理的な感情のあり方」であるとしている。

また、共感とは利他性の主な動機(Batson:1987)や愛他的な行動を直接に生み出す中心的なメカニズムの1つであると考えられている(Davis et al.:1994)。

共感性と援助行動に関する研究としては、共感性と援助行動に関連がないとするもの(高木:1978, Batson et al.:1986)もあるが、共感と援助行動に関連した構成概念との間に関係があると結論づけているもの(Underwood et al.:1982, Eisenberg et al.:1987)や、共感性が援助行動を促進するとするもの(Toi et al.:1982, Eisenberg et al.:1987)、あるいは、児童において共感と援助行動に正の関連があったと報告しているもの(桜井:1986)や共感性の高い方が援助行動意図が高い(渡辺, 衛藤:1990)ことを見出したものもあり、共感と援助行動には関連があるとするものが多くを占めている。このようなことから、受容的な人の要因の1つとして共感性を考えることができるのではないだろうか。

共感性の高い人に広報活動などを行い、精神障害に関する正しい知識を提供

一方、関心を持つ人は知識を得ることにより理解をし、接触体験をもつことで一層受け入れ意識が良好になる、あるいは、積極的な支援者になるという A 方向に進むことを期待している。さらに、地域精神保健のための援助活動をめざすボランティアは自己や他者に肯定的であり、感情的安定性と共感性が高いという研究(Allen et al.:1983)もあることから、精神保健ボランティアなどの積極的な支援を行い共感性を高めた人は B 方向に進む可能性もあるのではないだろうか。

偏見

無関心

関心

知識

接触体験

理解

接触体験

知識

受け入れ

共感性

A

B

婦人会・ボランティア

精神保健ボランティア

精神保健ボランティア

(積極的)

(積極的)

このようなことをもとに、受容的な人の1要因としての共感性を図3にあてはめたものが図4である。

4. 共感性と動物飼育経験

精神保健の促進のための介入の1例として学校などの「特定の場を標的にした介入」(WHO:2004)や医学生や10代の若者といった「一般市民の細分化」によるターゲットグループに対する働きかけが必要だとされている(WPA:2002)。これらのことから、ターゲットをしぼることが必要である。

しかし、共感性が高いということが受容的である1要因だとしても、例えば、ピアビンらが調査した献血行動(松井, 浦:1998)のように、共感性の高い人が表面に表れる属性を持つ場合はそのような人に対して働きかけることができる。しかし、行動などに表れない人に対しては働きかけを行うことはできない。では、共感性の高い人にはどのような人が考えられるのだろうか。

Endenburgら(2000)によると、子どもは早くから動物の気持ちと欲求、そして他の人のそれらを理解することを学んでいく可能性があり(Paul:1992)、ペットを飼っている子どもたちの方が他者に共感できる力を持っている(Bryant:1985)としている。さらに、Poreskyら(1990)は子どもとペットのつながりと社会能力、共感性の関連を、Poresky(1990)やPaul(2000)は人に対する共感と動物に対する共感との関連を報告している。また、塗師(2000)は「動物の飼育経験は共感性の発達にプラスの影響を及ぼす傾向があり、動物の飼育経験がありかつ動物に対する好意度が高いということは共感性の発達にプラスの影響を及ぼす傾向がある」と報告している。

このようなことから、動物飼育経験者は共感性を高め、受容的な人である可能性が考えられる。

文 献

- 相沢寛史「対人関係における成果評価とパーソナリティ特性—愛他性、他者指向性と社会的交換モデルの関係」日本性格心理学会大会発表論文集 7, 1998, 34-35
- Allen, N., Rushton, P. Personality characteristics of community mental health volunteers: A review. *Journal of Voluntary Action Research*, 12, 1983, 36-49
- Allport, G. W. The nature of prejudice. Addison-Wesley, 1961. 原谷道夫, 野村昭訳『偏見の心理』培風館 1969
- Batson, C. D. Prosocial motivation: Is it every truly altruistic? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 20, 1987, 65-122
- Batson, C. D., Bolen, M. H. et al. Where is the altruism in the altruistic personality? *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 212-220
- Davis, M. H. Empathy: A social psychological approach. 1994, 菊池章夫訳『共感の社会心理学』川島書店 1999
- Eisenberg, N., Miller, P. A. The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, 101, 1987, 91-119
- Eisenberg, N., Mussen, P. H. The roots of prosocial behavior in children. Cambridge University Press, 1989. N. アイゼンバーグ, P. マッセン『思いやり行動の発達心理』金子書房 1996)
- Endenburg, N., Baarda, B. 「人の健全な生活に貢献するペットの役割: こどもの発達への影響」1995 ロビンソン編 山崎恵子訳『人と動物の関係学』インターズー 2000
- 蓮井千恵子, 坂本真士他「精神疾患に対する否定的態度—情報と偏見に関する基礎的研究—」季刊 精神科診断学 10(3), 1999, 319-328
- 伊藤秀子「共感」安藤延男編『人間関係入門』ナカニシヤ出版 1996
- 松井豊, 浦光博『人を支える心の科学』誠信書房 1998
- Merton, R. K. Social ambivalence and other essays. New York, Free Press, 1976
- 中村真, 川野健治「精神障害者に対する偏見に関する研究—女子大学生を対象にした実態調査をもとに—」川村学園女子大学紀要 13(1), 2002, 137-149
- 塗師斌「動物飼育経験と動物に対する好感度が共感性に及ぼす影響」横浜国立大学教育人間科学部紀要 I、教育科学 3, 2000, 1-10
- 小川一夫監修『改訂新版 社会心理学用語辞典』北大路書房 1995
- 小澤温「ふらっと (人権情報ネットワーク) 施設コンフリクト第 3 回」
<http://www.jinken.ne.jp/challenged/conf/conf3.html>
- Poresky, R. H. The young children's empathy measure: Reliability, validity and effects of companion animal bonding. *Psychological Reports*, 66, 1990,

- Poresky, R. H., Hendrix, C. Differential effects of pet presence and pet-bonding on young children. *Psychological Reports*, 67, 1990, 51-54
- 桜井茂雄「児童における共感と向社会的行動の関係」*教育心理学研究* 34(4), 1986, 342-346
- 澤本宗彦, 桑原寛他「精神障害者に関する意識調査報告—民生委員、看護学生、精神保健ボランティアの意識—」*神奈川県精神医学会誌* 46, 1996, 49-58
- 高木秀明「情動的共感性と援助行動の関係に関する研究」*日本教育心理学会第18回総会論文集* 1976, 448-449
- Thompson, A. H., Stuart, H., Bland, R. C. et al., Attitudes about schizophrenia from the pilot site of the WPA worldwide campaign against the stigma of schizophrenia, *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 37, 2002, 475-482
- Toi, M. & Batson, C. D., More evidence that empathy is a source of altruistic motivation, *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1982, 281-292
- Underwood, B., Moore, B. Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, 91, 1982, 143-173
- 渡辺弥生、衛藤真子「児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響」*教育心理学研究* 38(2), 1990, 151-156
- WPA. Schizophrenia-Open the door- 日本精神神経学会監訳『こころの扉を開く—統合失調症の正しい知識と偏見克服プログラム』医学書院 2002
- WHO. The WorldHealth Report 2001. 中野善達監訳『世界の精神保健』明石書店 2004
- 矢島まさえ, 梅林奎子他「山間地域における精神保健福祉に関する住民意識—精神障害者と接した体験の有無による比較—」*群馬パース学園短期大学紀要* 5(1), 2003, 3-12
- 吉森護編著『人間関係の心理学ハンドブック』北大路書房 1997

4 章 動物病院受診者の精神障害者に対する意識（調査 2）

動物飼育経験者は精神障害者に対して受容的な可能性があるものの、動物飼育経験者を探すことは困難であり、表面に表れる外から見える属性とはならない。そこで、現在動物を飼育している人も飼育経験者に含まれ、現在の飼育者は動物病院へ受診に訪れる場合があると考えた。そして、動物病院において受診者の精神障害者に対する意識を調査した。

1. 調査方法

（1）対象者

和歌山市内の R 動物病院において、飼育動物の受診その他で訪れる人たちを対象にアンケート調査を行った。対象は 500 人とし、調査票は動物病院のスタッフに個別の手渡しを依頼した。

（2）期間と回収方法

配布期間は 2004 年 6 月 19 日から 7 月 18 日までの 1 ヶ月間である。また、受診者はペットを連れており、その場でアンケート用紙に記入しづらい場合が多いため、帰宅後の記入とし、郵送で回収をした。2004 年 7 月末日を投函締め切りとし、331 票を回収した。（回収率 68.2%）

（3）調査内容

性別、年代、動物の嗜好、飼育経験、精神障害に関する知識、事例をもとに精神障害者に対する受け入れ意識、そして同じ事例の人が動物好きであった場合の受け入れ意識を問う項目である。

動物の好み、飼育動物の種類を問う項目は、「動物愛護に関する世論調査」（2004）をもとに作成した。

飼育経験や飼育をしていることに関しては様々な飼い方があり、どのような飼い方が飼育しているといえるのかという問題があるが、この調査においては、回答者が飼育経験がある、飼育をしていると答えた場合は、飼育経験者、あるいは飼育者とみなしている。

精神障害者に対する知識は全家連(1998)などで行われた調査項目の中から、「日本には、約 200 万人の精神障害者がいる」「33 万人が精神病院に入院し、その 4 割以上が 5 年以上入院している」「一般の人口の 100 人に 1 人くらいがかかる統合失調症は、病気がよくなれば普通の社会生活をおくることができる」「精神障害者が刑事事件をおこす比率は、一般の人が事件をおこす比率より少ない」の 4 項目について、「知っている」「聞いたような気がする」「知らない」をあげて回答の選択肢とした。

また、受け入れ程度については大島ら(大島他:1989, 大島他:1988, 大島:1992)

の、安定はしているが後遺症状のある統合失調症の A さんの事例をあげ「隣に単身で越してくる」場合どの程度受け入れるかを問い、「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」「あまりかかわらないようにする」「他の場所に住むように働きかける」「その他」を選択肢とした。また、第 2 章のイベント調査と同様に本調査においても「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」と答えた人は精神障害者の支援者と位置づけている。

さらに、A さんが動物好きだった場合どの程度受け入れるかを問う項目を加え、質問項目数は、回答者に負担のないように全 10 問とし、A3 用紙 1 枚を用いて行った（資料 1）。

（４）分析方法

分析は、 χ^2 乗検定、フィッシャー正確確率検定を用いて比較を行った。

２．結果

（１）先行調査との比較

精神障害者との日常的な接触を持つ一般住民の精神障害者に対する意識を調査（大島他：1989, 大島他：1988）したものがあがあるが、これは、1987 年に大島らが精神病院の周辺に暮らしている地域住民 500 人を対象に行ったものである（以下「三枚橋病院周辺地区調査」とする）。1988 年には東京都 23 区に住む 1000 人を対象に精神障害者に対する受け入れ意識が調査（大島：1992）されている（以下「東京都調査」とする）。全家連（全国精神障害者家族会連合会）では 1997 年に①社会で暮らす人たちの「こころの健康」についての関心の有様を知ること②社会で暮らす人たちの精神障害（者）についての知識や理解のしかたを聞くことを目的として 2000 人を対象に全国調査を行っている（以下「全家連調査」とする）。三枚橋病院周辺地区調査、東京都調査、全家連調査は大島ら（大島他：1989, 大島他：1988, 大島：1992）の同じ事例を用いて受け入れ程度を調査しており、これらの調査と動物病院受診者に限定して行った本調査とを比較した（表 1）。

表 1 受け入れ意識

	全家連 ①		東京都 ②		三枚橋周辺 ③		本調査 ④		全体		検定 ①×④ ②×④ ③×④ 「手を貸す・同じような付き合い」 ×「関わりたくない・他の場所へ」		
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%			
できるだけ手を貸す	387	28.9	79	18.5	105	26.4	61	18.4	632	25.3	P=0.02	P=0.00	P=0.01
同じような付き合い	672	50.1	227	53.2	200	50.4	224	67.7	1323	53.0			
あまり関わりたくない	231	17.2	103	24.1	76	19.1	42	12.7	452	18.1			
他の場所へ働きかけ	5	0.4	2	0.5	2	0.5	0	0.0	9	0.4			
その他	25	1.9	12	2.8	8	2.0	4	1.2	49	2.0			
無回答	21	1.6	4	0.9	6	1.5	0	0.0	31	1.2			
全体	1341	100.0	427	100.0	397	100.0	331	100.0	2496	100.0			

注 χ^2 test [その他、無回答を除く]

精神障害者に対する受け入れに関して、「困っている時はできるだけ手を貸す」と「他の人と同じような近所付き合いをする」を受容的態度とし、「あまりかかわらないようにする」と「他の場所に住むように働きかける」を拒否的態度とした場合、いずれの調査よりも本調査のほうが受け入れにおいて良好であった。

動物病院受診者と精神障害者に対する受け入れに関連が認められたため、本調査において以下のような項目に関して分析を行った。

(2) 性別・年代

性別では、男性が23%、女性が77%であり、圧倒的に女性が多い。また、年代は50代が最も多く、40代と50代をあわせると、全体の約半数を占めている(表2)。

表2 性別と年代

	10代以下		20代		30代		40代		50代		60代		70代以上		全体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
男性	2	2.7	9	12.0	14	18.7	11	14.7	22	29.3	15	20.0	2	2.7	75	100.0
女性	5	2.0	39	15.3	49	19.2	66	25.9	64	25.1	26	10.2	6	2.4	255	100.0
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
全体	7	2.1	48	14.5	63	19.0	77	23.3	87	26.3	41	12.4	8	2.4	331	100.0

(3) 精神障害に関する知識

すべての項目において「知らない」と答えた人は6割以上であり最も多かった。また、「33万人が精神病院に入院し、4割が5年以上入院している」ことを「知っている」と答えたのは約5%にすぎず、ほとんどの人が入院している精神障害者に関する知識はもっていない。4項目中、「一般の人口の100人に1人くらいがかかる統合失調症は、病気がよくなれば普通の社会生活をおくることができる」が最も知られており19%であった。

(4) 受け入れ

Aさんが隣に引っ越してきた場合、「できるだけ手を貸す」と答えた人は18.4%、「他の人と同じような近所付き合い」は67.7%、「あまりかかわらない」は12.7%、「その他」は1.2%であり、「他の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった(表1)。

また、「引っ越してきたAさんが動物好きだった場合」は、そうでない場合よりも「できるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合い」と答えた人が多く、「なるべく関わらないようにする」が減少する傾向にある。

しかし反面、ペットが相手にけがなどをさせはしないかという気遣いから「Aさんが動物好きの場合」に「あまりかかわらない」と答えるという自由記述もあり、必ずしも拒否的な態度とはいえない。

(5) 性別と知識・受け入れ

「日本には、約 200 万人の精神障害者がいる」ことを「知っている」「聞いたような気がする」のいずれかに答えた人は、男性が 35%、女性は 25%だった。

「33 万人が精神病院に入院し、その 4 割以上が 5 年以上入院している」では男性 21%、女性 12%、「一般の人口の 100 人に 1 人くらいがかかる統合失調症は、病気がよくなれば普通の社会生活をおくることができる」では男性 32%、女性 40%、また、「精神障害者が刑事事件をおこす比率は、一般の人が事件をおこす比 4 項目中で「一般の人口の 100 人に 1 人くらいがかかる統合失調症は、病気がよくなれば普通の社会生活をおくることができる」が男女共に一番知られている項目であった（表 3）。

表 3 性別と知識

	男 性		女 性		全 体		検 定
	人	%	人	%	人	%	
約200万人の精神障害者							
知っている	7	9.3	21	8.2	28	8.5	P=0.23
聞いた気がする	19	25.3	43	16.9	62	18.8	
知らない	49	65.3	190	74.5	239	72.4	
無回答	0	0.0	1	0.4	1	0.3	
全体	75	100.0	255	100.0	330	100.0	
33万人が入院し、 その4割が5年以上							
知っている	6	8.0	12	4.7	18	5.5	P=0.17
聞いた気がする	10	13.3	20	7.8	30	9.1	
知らない	59	78.7	223	87.5	282	85.5	
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	75	100.0	255	100.0	330	100.0	
統合失調症は病状改善で 社会生活を送れる							
知っている	12	16.0	51	20.0	63	19.1	P=0.46
聞いた気がする	12	16.0	51	20.0	63	19.1	
知らない	51	68.0	153	60.0	204	61.8	
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	75	100.0	255	100.0	330	100.0	
刑事事件の比率は 一般人より少ない							
知っている	11	14.7	34	13.3	45	13.6	P=0.38
聞いた気がする	6	8.0	36	14.1	42	12.7	
知らない	58	77.3	185	72.5	243	73.6	
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	75	100.0	255	100.0	330	100.0	

注: χ^2 test [無回答を除く]

表 4 性別と受け入れ

	男 性		女 性		全 体（無回答1）		検 定
	人	%	人	%	人	%	
Aさんが引越してきた場合							
手を貸す	11	14.7	50	19.6	61	18.5	P=0.55
同じような付き合い	55	73.3	169	66.3	224	67.9	
あまり関わらない	9	12.0	32	12.5	41	12.4	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
その他	0	0.0	4	1.6	4	1.2	
全体	75	100.0	255	100.0	330	100.0	

注: χ^2 test [他の場所、その他、無回答を除く]

Aさんの受け入れに関しては、「できるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合い」と答えた人をあわせると男女とも8割強であり、また、性別においては、知識・受け入れともに男女間の違いは認められなかった（表4）。

（6）年代と知識

全般的に60代が「知っている」「聞いたような気がする」のどちらかに答えた人の割合が35%～51%と他の年代よりも多かった。逆に30代ではどの項目においても知識を持っている人が少なく、「33万人が精神病院に入院し、その4割以上が5年以上入院している」に「知っている」と答えた人はいなかった。

（7）年代と受け入れ

「できるだけ手を貸す」と答えた人の割合は、10代以下を除いた他の年代では20%を下回っているのに比べ、50代は約28%と高く積極的な傾向がみられたが、どの年代も受け入れに違いは認められなかった（表5）。

表5 年代と受け入れ

	年代							全体	検査						
	10代以下 ①	20代 ②	30代 ③	40代 ④	50代 ⑤	60代 ⑥	70代以上 ⑦		①×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」	②×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」	③×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」	④×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」	⑤×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」	⑥×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」	⑦×他 「手を貸す・同じような近所付き合い」
できるだけ手を貸す	4	3	8	12	25	8	1	61	P=0.38	P=0.93	P=0.28	P=0.49	P=0.43	P=0.56	P=0.99
同じような近所付き合い	3	36	48	54	51	28	4	224							
あまり関わらない	0	9	6	9	10	5	3	42							
他の場所へ働きかけ	0	0	0	0	0	0	0	0							
その他	0	0	1	2	1	0	0	4							
全体	7	48	63	77	87	41	8	331							

注 Fisher's test [その他は除く]

（8）知識と受け入れ

4項目中「一般の人口の100人に1人くらいがかかる統合失調症は、病気がよくなれば普通の社会生活をおくることができる」では、「できるだけ手を貸す」と答えた人の割合は「知っている」と答えた27%、「聞いたような気がする」の28%でありあまり差はないが、他の3項目では「できるだけ手を貸す」と答えた人の割合は「知らない」「聞いたような気がする」「知っている」の順に高くなっている。逆に、「あまりかかわらない」と答えた人の割合は「知らない」人のほうが高い（図1-1、1-2、1-3、1-4）。この傾向は、動物飼育者に限らず一般的にも言われていることである。

図1-1 200万人の精神障害者

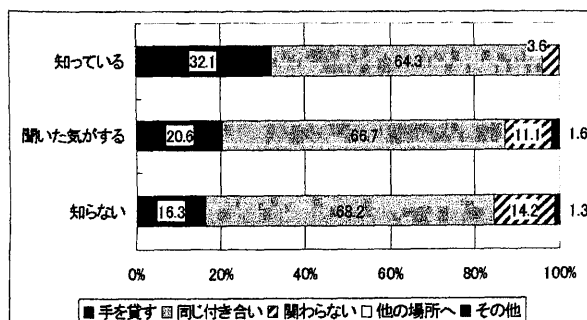


図1-2 33万人が入院

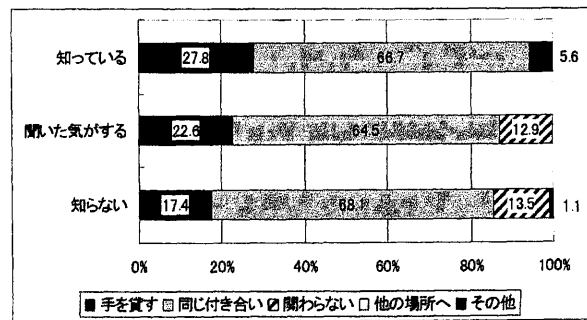


図 1-3 統合失調症

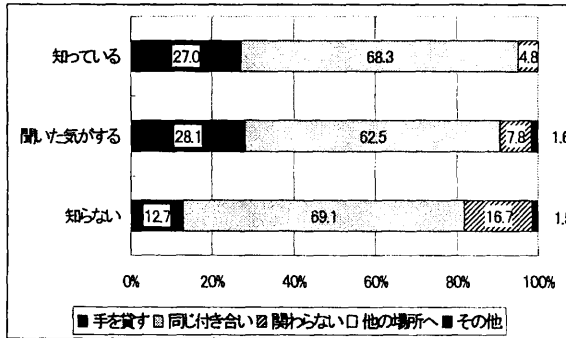
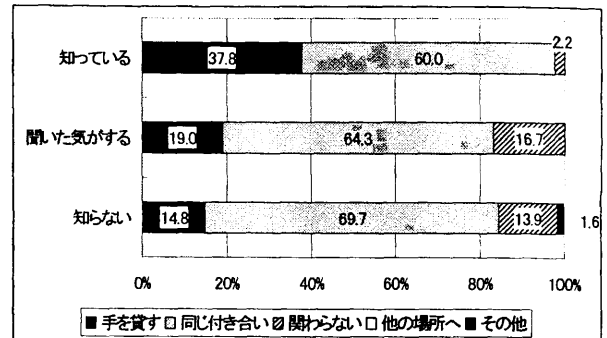


図 1-4 刑事事件の比率



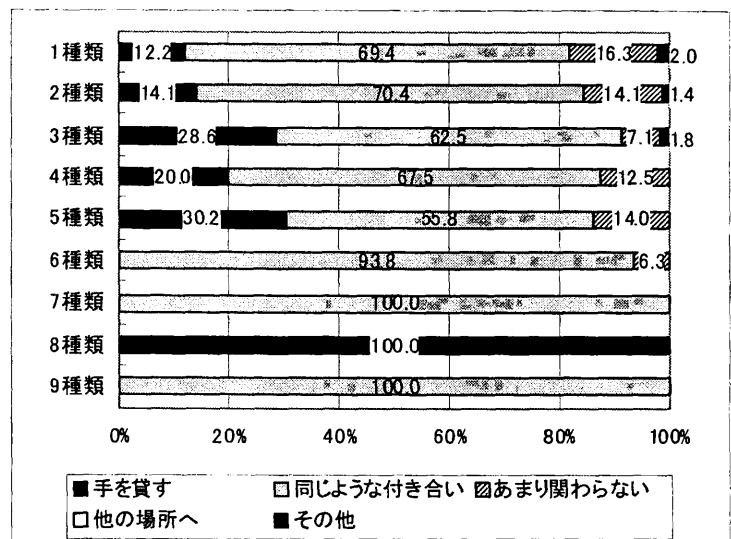
(9) 飼育経験の種類数と受け入れ

飼育したことがある動物の種類は、1種類という人が最も多く、全体の約3割近くを占めており、半数以上の人々が1種類、あるいは2種類である(表6)。また、1種類の場合は犬が多い。

表 6 飼育経験の種類数

	人	%
9種類	2	0.6
8種類	2	0.6
7種類	3	0.9
6種類	16	4.8
5種類	43	13.0
4種類	40	12.1
3種類	56	16.9
2種類	71	21.5
1種類	98	29.6
全体	331	100.0

図 2 飼育数と受け入れ



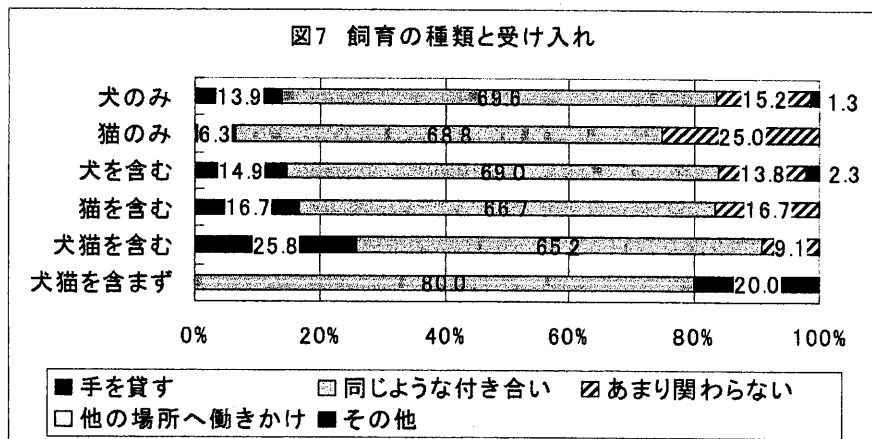
受け入れに関しては、「できるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合い」と答えた人をあわせるとすべての種類数で8割以上を占め、飼育動物が1種類だから受け入れに否定的というわけではない(図2)。これは、「飼育経験の有無だけでも共感性との関係が見られ」「かわいがって飼育したかどうかということが共感性の発達にプラスの影響を及ぼす」とする塗師(2000)の研究とも一致し、積極的とまではいかななくても受容的ということと、飼育経験のある動物の種類数とは関連がないといえるだろう。

(10) 動物の種類・年代と知識・受け入れ

ペットの種別と共感性を調査した塗師(2002)によると「ペットの種別によっても、飼育経験と共感性との関係は異なるのではないかと考えられる」ため、飼育の種類・年代別の知識と受け入れの関係を調べた。

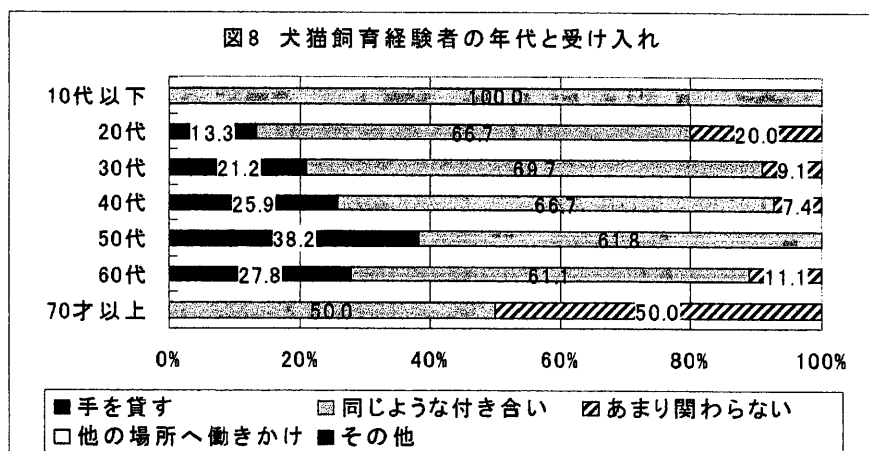
その結果、特筆すべきは、犬と猫の飼育経験のある人は9割以上が「できるだけ手を貸す」と「他の人と同じような近所付き合い」のどちらかに答えている（図3）。

図3 飼育の種類と受け入れ



そして、その中でも特に50代の人すべてが「できるだけ手を貸す」と「他の人と同じような近所付き合い」のどちらかに答えており、「あまりかかわらない」と「他の場所に住むように働きかけ」という拒否的な答えをした人は、まったくいなかった（図4）。

図4 犬猫飼育経験者の年代と受け入れ



さらに、これらの人とそれ以外の飼育経験者の間に知識の違いは認められず、犬と猫の飼育経験のある50代の人知識が同程度であっても、それ以外の飼育経験者よりも受け入れが良好であることが明らかになった（表7、8）。

表7 50代の犬猫(他の動物を含む)飼育経験者とそれ以外の飼育経験者における知識

	50代の 犬猫飼育経験者		その他の 飼育経験者		全 体		検 定 「知っている・聞いた気」 ×「知らない」
	人	%	人	%	人	%	
約200万人の精神障害者							
知っている	2	5.9	26	8.8	28	8.5	P=0.53
聞いた気がする	7	20.6	56	18.9	63	19.0	
知らない	25	73.5	214	72.1	239	72.2	
無回答	0	0.0	1	0.3	1	0.3	
全体	34	100.0	297	100.0	331	100.0	
33万人が入院し、 その4割が5年以上							
知っている	2	5.9	16	5.4	18	5.4	P=0.41
聞いた気がする	2	5.9	29	9.8	31	9.4	
知らない	30	88.2	252	84.8	282	85.2	
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	34	100.0	297	100.0	331	100.0	
統合失調症は病状改善で 社会生活を送れる							
知っている	7	20.6	56	18.9	63	19.0	P=0.98
聞いた気がする	11	32.4	53	17.8	64	19.3	
知らない	16	47.1	188	63.3	204	61.6	
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	34	100.0	297	100.0	331	100.0	
刑事事件の比率は 一般人より少ない							
知っている	5	14.7	40	13.5	45	13.6	P=0.75
聞いた気がする	5	14.7	37	12.5	42	12.7	
知らない	24	70.6	220	74.1	244	73.7	
無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	34	100.0	297	100.0	331	100.0	

注: Fisher's test [無回答は除く]

表8 50代の犬猫(他の動物を含む)飼育経験者とそれ以外の飼育経験者の意識

	50代の 犬猫飼育経験者		それ以外の 飼育経験者		全 体		検定 「手貸す・同じ付き合い」× 「関わらない・他の場所」
	人	%	人	%	人	%	
Aさんが弓越してきた場合							
手を貸す	13	38.2	48	16.2	61	18.4	P=0.01
同じような付き合い	21	61.8	203	68.4	224	67.7	
あまり関わらない	0	0.0	42	14.1	42	12.7	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
その他	0	0.0	4	1.3	4	1.2	
全体	34	100.0	297	100.0	331	100.0	

注: Fisher's test [その他を除く]

3. 考察

(1) 回収率について

本調査の回収率は 68.2% であり、郵送による回収としては、比較的高い回収率が確保できた。

これは、馴染みのあるスタッフが、清算時に個別に手渡すことにより、安心感をもって回答することができたためではないだろうか。また、見開きの A3 用紙に、質問項目を 10 問にしたこと、筆記用具を同封したことで、開封した時に気軽に最後まで記入することができ、これらも回収率を高めた要因であると考えられる。

(2) 代表性について

本調査は、和歌山市内の 1 つの動物病院への受診者に対し、スタッフが一定期間渡していくという方法であったため、非確率抽出による調査である。このため、偏りのあるサンプルに対する検討結果であるという限定がある。

(3) 受け入れについて

精神障害者に対する受け入れは、過去に行われた調査よりも、対象を動物病院受診者に限定した本調査における受け入れのほうが全般的に良好であった。

当事者の多くは、地域住民に対して他の人と同じように話しをするなどというきわめて一般的な普通の近所付き合いを望んでいる人が多い。すなわち、当事者がまず求めているのは、本調査における「他の人と同じような近所付き合いをする」人であり、そして、このような人が動物病院受診者には多いということが明らかになった。

(4) 動物の種類・年齢について

犬と猫のどちらも飼育した経験がある人のうち、約 1 割が 50 代であった。これらの人は、それ以外の飼育経験者と知識レベルが同じ程度であっても、精神障害者に対して一層受容的な傾向にあることが明らかになった。したがって、これらの人たちは、動物飼育経験者の中でも、精神障害者を受け入れる可能性の高い存在であり、犬と猫の両方を飼育している人に対して啓発活動などの働きかけを行うことは、大変有効だと考えられる。

(5) 動物好きの精神障害者に対する受け入れについて

「A さんが動物好きの場合」は、そうでない場合よりも「できるだけ手を貸す」と答えた人の割合が増えている。

田之内 (1996, 1997) によると、被験者に絵を見せた場合、描かれている風景に動物が存在すると、その絵の中の人物がより安全でリラックスしているように認知されるなど、印象が大きく異なる傾向があり、また、動物の存在によって二者の人間関係の認知を和らげるとしている。このことから、「A さんが動物

好きの場合」、精神障害者に限らず動物好きの相手に対しては、安全でリラックスできると感じられ、知らない相手に対しての身構えが和らぎ、積極的に「できるだけ手を貸す」と答えた人が増えたと考えられる。

いくつかの動物病院が、合同でしつけ教室や飼い主の交流会などのイベントを行っているのを目にすることがあるが、このようなイベントに、動物の好きな当事者が参加することで、精神障害者のスピークアウトや接触体験の機会が生まれる可能性がある。また、このようなイベントを通じて、ボランティア活動を呼びかけるという方法も考えられるのではないだろうか。

このように動物病院が知識普及の啓発活動の場となる可能性が示唆された。

文 献

- 内閣総理大臣官房広報室「動物愛護に関する世論調査」2004
- 塗師斌「動物飼育経験と動物に対する好感度が共感性に及ぼす影響」横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ, 教育科学 3, 2000, 1-10
- 塗師斌「ペット飼育経験が共感性の発達に及ぼす影響—ペットの種別に見た場合—」横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ, 教育科学 4, 2002, 27-34
- 大島巖「精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度—尺度の妥当性を中心に—」精神保健研究 4 (通巻 38) 1992, 25-37
- 大島巖, 中村佐織, 山崎喜比古, 小沢温, 三田優子, 園田恭一「障害者を包み込んだ保健と福祉のコミュニティづくりに関する調査研究 —福祉施設や精神病院の社会化・開放化と周辺住民の受け入れ姿勢—」『保健と福祉のコミュニティづくりに関する研究』昭和 61 年度文部省科学研究報告書 (園田恭一代表) 1988, 109-237
- 大島巖, 山崎喜比古, 中村佐織, 小沢温「日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観」社会精神医学 12(3), 1989, 286-297
- 田之内厚三「動物のいる風景—動物の存在が対人認知に及ぼす影響—」日本応用心理学会第 63 回大会発表論文集 1996, 58
- 田之内厚三「動物のいる風景—動物の存在が対人関係の認知に及ぼす影響—」日本応用心理学会第 64 回大会発表論文集 1997, 57
- 全国精神障害者家族会連合会『精神障害者観の現状' 97』ぜんかれん保健福祉研究所モノグラフ 22, 1998

～～ 動物の嗜好と精神障害者に対する意識調査 ～～

あてはまるものに○印をつけて下さい。

1. あなたの性別はどちらですか？

□女

2. あなたの年齢はどれにあたりますか？

□40才代

☐70才以上

3. あなたはどんな動物が好きですか？

次の中からあてはまるものすべてに印をつけて下さい。(動物が好きでない方は記入しなくて結構です。)

☐うさぎ

□ 猛獸類

)

4. あなたはどんな動物を飼っていますか？又は、飼ったことがありますか？

次の中からあてはまるものすべてに印をつけて下さい。(動物を飼ったことがない方は記入しなくて結構です。)

うさぎ

□猛兽類

)

厚生労働省の病院報告や警察庁の統計では、以下のことが報告されていますが、5. ～9. のことをすでにご存知でしたか？

5. 「日本には、約200万人の精神障害者がいる」

☐知らない、

6. 「33万人が入院し、その4割が6年以上入院している」

☐ 知らない、

7. 「一般の人口の100人に1人ぐらいかかる統合失調症は、病気がよくなれば普通の社会生活を送ることができる」

☐ 知らない、

8. 「精神障害者が刑事事件をおこす比率は一般の人が事件を起こす比率より少ない」

☐ 知らない、

資料 1 つづき

次の事例を読んで、お答え下さい。

統合失調症で精神病院に入院したことのあるAさん(35才、男性、独身)は、病気がよくなったので、主治医の勧めでアパートを借りて生活しようと考え、何軒かの大家さんに当たてみましたが、すべて断られてしまいました。

たしかにAさんには、気力が続かず、長時間の勤めには出られない後遺症が残っていますし、多少ノキノキしないところもあります。

しかし、短時間の軽作業をするために同じ病気の患者さん達が通う作業所には、毎日行くことができます。それに人柄はまじめですし、買い物や炊事なども一般の人と同じようにできるのです。

アパート入居を断られてAさんは、精神病院に入院していたということで入居できないのは本当にくやしいと思っただけです。

9. あなたのとなりにAさんが引っ越してきた場合、どのような近所付き合いをしますか？

(あなたの考えにもっとも近いものを1つだけ選んで下さい。)

- ☐ 困っている時はできるだけ手を貸す
- ☐ 他の人と同様な近所付き合いをする
- ☐ あまりかかわらないようにする
- ☐ 他の場所に住むように働きかける
- ☐ その他()

10. 引っ越してきたAさんが動物好きだった場合、どのような近所付き合いをしますか？

(あなたの考えにもっとも近いものを1つだけ選んで下さい。)

- ☐ 困っている時はできるだけ手を貸す
- ☐ 他の人と同様な近所付き合いをする
- ☐ あまりかかわらないようにする
- ☐ 他の場所に住むように働きかける
- ☐ その他()

ご協力ありがとうございました。

資料 2

基礎集計 年齢別 N=331

	19才以下		20代		30代		40代		50代		60代		70才以上		全体	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
問1 性別(無回答1)																
1)男	2	28.6	9	18.8	14	22.2	11	14.3	22	25.6	15	36.6	2	25.0	75	22.7
2)女	5	71.4	39	81.3	49	77.8	66	85.7	64	74.4	26	63.4	6	75.0	255	77.3
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	86	100.0	41	100.0	8	100.0	330	100.0
(無回答1)																
問3 どんな動物が好きですか [複数回答]																
1)犬	7	100.0	42	87.5	59	93.7	70	90.9	82	94.3	35	85.4	8	100.0	303	91.5
2)ねこ	6	85.7	34	70.8	34	54.0	37	48.1	45	51.7	19	46.3	3	37.5	178	53.8
3)魚類	3	42.9	12	25.0	8	12.7	15	19.5	26	29.9	10	24.4	0	0	74	22.4
4)鳥類	3	42.9	7	14.6	13	20.6	15	19.5	22	25.3	7	17.1	1	12.5	68	20.5
5)うさぎ	4	57.1	12	25.0	20	31.7	20	26.0	24	27.6	8	19.5	1	12.5	89	26.9
6)は虫類	0	0	3	6.3	2	3.2	4	5.19	2	2.3	0	0	0	0	11	3.3
7)ねずみ類	3	42.9	7	14.6	8	12.7	9	11.7	3	3.4	0	0	0	0	30	9.1
8)昆虫類	2	28.6	1	2.1	2	3.2	9	11.7	8	9.2	1	2.4	1	12.5	24	7.3
9)さる類	2	28.6	8	16.7	10	15.9	9	11.7	9	10.3	2	4.9	0	0	40	12.1
10)猛獣類	3	42.9	6	12.5	2	3.2	5	6.5	4	4.6	0	0	0	0	20	6.0
11)その他	1	14.3	1	2.1	0	0	2	2.6	6	6.9	0	0	0	0	10	3.0
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0
問4 どんな動物を飼っていますか 又は飼ったことがありますか [複数回答]																
1)犬	7	100.0	39	81.3	61	96.8	69	89.6	79	90.8	36	87.8	7	87.5	298	90.0
2)ねこ	1	14.3	23	47.9	34	54	33	42.9	42	48.3	22	53.7	5	62.5	160	48.3
3)魚類	3	42.9	20	41.7	30	47.6	44	57.1	37	42.5	14	34.1	2	25.0	150	45.3
4)鳥類	2	28.6	18	37.5	27	42.9	25	32.5	34	39.1	15	36.6	2	25.0	123	37.2
5)うさぎ	0	0	3	6.3	7	11.1	9	11.7	15	17.2	7	17.1	0	0	41	12.4
6)は虫類	0	0	3	6.3	3	4.8	5	6.5	4	4.6	1	2.4	0	0	16	4.8
7)ねずみ類	2	28.6	8	16.7	15	23.8	14	18.2	10	11.5	1	2.4	1	12.5	51	15.4
8)昆虫類	1	14.3	8	16.7	20	31.7	22	28.6	24	27.6	5	12.2	2	25.0	82	24.8
9)さる類	0	0	1	2.1	1	1.6	1	1.3	0	0	0	0	0	0	3	0.9
10)猛獣類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11)その他	0	0	2	4.2	3	4.8	1	1.3	4	4.6	0	0	0	0	10	3.0
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0
問5 約200万人の精神障害者(無回答1)																
1)知っている	1	14.3	5	10.4	3	4.8	4	5.2	6	6.9	9	22.5	0	0	28	8.5
2)聞いたような気がする	0	0	6	12.5	6	9.5	18	23.4	18	20.7	12	30.0	3	37.5	63	19.1
3)知らない	6	85.7	37	77.1	54	85.7	55	71.4	63	72.4	19	47.5	5	62.5	239	72.4
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	40	100.0	8	100.0	330	100.0
(無回答1)																
問6 33万人が精神病院に入院 その4割が5年以上入院																
1)知っている	1	14.3	4	8.3	0	0	3	3.9	6	6.9	4	9.8	0	0	18	5.4
2)聞いたような気がする	0	0	2	4.2	5	7.9	6	7.8	8	9.2	10	24.4	0	0	31	9.4
3)知らない	6	85.7	42	87.5	58	92.1	68	88.3	73	83.9	27	65.9	8	100.0	282	85.2
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0
問7 統合失調症はよくなれば 普通の社会生活を送れる																
1)知っている	2	28.6	10	20.8	7	11.1	16	20.8	16	18.4	11	26.8	1	12.5	63	19.0
2)聞いたような気がする	0	0	7	14.6	10	15.9	14	18.2	21	24.1	9	22.0	3	37.5	64	19.3
3)知らない	5	71.4	31	64.6	46	73.0	47	61.0	50	57.5	21	51.2	4	50.0	204	61.6
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0

資料 2 つづき

問8 精神障害者の刑事事件
比率は一般の人より少ない

1) 知っている	2	28.6	6	12.5	5	7.9	11	14.3	9	10.3	12	29.3	0	0	45	13.6
2) 聞いたような気がする	0	0	5	10.4	4	6.3	11	14.3	15	17.2	5	12.2	2	25.0	42	12.7
3) 知らない	5	71.4	37	77.1	54	85.7	55	71.4	63	72.4	24	58.5	6	75.0	244	73.7
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0

問9 となりにAさんが引越し

1) 困っている時は手を貸す	4	57.1	3	6.3	8	12.7	12	15.6	25	28.7	8	19.5	1	12.5	61	18.4
2) 他の人と同じような付合	3	42.9	36	75.0	48	76.2	54	70.1	51	58.6	28	68.3	4	50.0	224	67.7
3) あまり関わらない	0	0	9	18.8	6	9.5	9	11.7	10	11.5	5	12.2	3	37.5	42	12.7
4) 他の場所へ働きかけ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5) その他	0	0	0	0	1	1.6	2	2.6	1	1.1	0	0	0	0	4	1.2
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0

問10 Aさんが動物好き

1) 困っている時は手を貸す	5	71.4	6	12.5	14	22.2	13	16.9	26	29.9	12	29.3	1	12.5	77	23.3
2) 他の人と同じような付合	2	28.6	35	72.9	44	69.8	51	66.2	53	60.9	25	61.0	4	50.0	214	64.7
3) あまり関わらない	0	0	6	12.5	4	6.3	9	11.7	7	8.0	2	4.9	3	37.5	31	9.4
4) 他の場所へ働きかけ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.4	0	0	1	0.3
5) その他	0	0	1	2.1	1	1.6	4	5.2	1	1.1	1	2.4	0	0	8	2.4
全体	7	100.0	48	100.0	63	100.0	77	100.0	87	100.0	41	100.0	8	100.0	331	100.0

5 章 動物飼育経験者と非飼育経験者の精神障害者に対する意識 (調査 3)

前章で動物病院が啓発活動のターゲットとして有効である可能性が示唆された。そこで、動物病院以外に有効な啓発活動としての場所を考えるために、動物飼育経験者群と非経験者群、現在の動物飼育者と非飼育者との精神障害者に対する意識を比較することにした。

1. 調査方法

(1) 対象者

H 専門学校において学生を対象にアンケート調査を行った。

(2) 実施日

実施は 2006 年 6 月 16 日である。また、アンケート用紙は記入後その場で回収を行い、有効票数は 100 票である。

(3) 調査内容

内容は性別、年齢、動物の嗜好、動物飼育経験、現在の動物飼育の有無、統合失調症についての知識の有無、そして、事例をもとに精神障害者に対する受け入れ意識を問う項目である。

受け入れ程度に関しては、第 2 章の調査 1、第 4 章の調査 2 と同様、大島ら(大島, 山崎他:1989, 大島, 中村他:1988, 大島:1992)の、安定はしているが後遺症状のある統合失調症の A さんの事例をあげ、「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」「あまりかかわらないようにする」「他の場所に住むように働きかける」「その他」を選択肢とした。

調査 1、調査 2 と同様に本調査においても「困っている時はできるだけ手を貸す」「他の人と同じような近所付き合いをする」と答えた人は精神障害者の支援者と位置づけている。

また、飼育経験や飼育をしていることに関しても調査 2 と同様に、回答者が飼育経験がある、飼育をしていると答えた場合は、飼育経験者、あるいは飼育者とみなしている。

質問項目数は全 12 問である。B4 用紙 1 枚を用い、無記名自己記入式質問紙による集合調査とした(資料 1)。

(4) 分析方法

分析はフィッシャー正確確率検定を用いて比較を行った。

2. 結果

(1) 属性

性別では全員が女性であり、10代が68人(68.0%)、20代が23人(23.0%)、30代が9人(9.0%)で、平均年齢は20.9歳、標準偏差は4.6であった。

(2) 動物飼育経験

動物飼育経験に関しては、飼育経験者は81人、非経験者は16人であった。また、飼育経験のある動物は、魚が最も多く57人(70.4%)、犬が49人(60.5%)、ねずみ類が27人(33.3%)であった。

(3) 現在の動物飼育状況

現在動物を飼育している人は37人(37.0%)、非飼育者は57人(57.0%)、無回答6(6.0%)人であった。また、現在の飼育者のうち、犬を飼育している人は27人(73.0%)、魚が7人(18.9%)、猫が6人(16.2%)であった。

(4) 統合失調症に関する知識

「統合失調症を知っているか」という問いに「知っている」と答えた人は19人(19.0%)、「名前だけは知っている」が33人(33.0%)、「聞いたような気がする」が18人(18.0%)、「知らない」が29人(29.0%)であり、「知っている」「名前だけは知っている」をあわせると半数以上になっている。(表1)

また、「知っている」「名前だけは知っている」と答えた人がどのようにして知ったかに関しては、「テレビや新聞などで知った」が最も多く36人(69.2%)であり、「本を読んだ」人は8(15.4%)人であった。(表2) これらのうち「テレビや新聞などで知った」のみの人は23人、「本を読んだ」のみの人は1人だった。

「知っている」と答えた人19人に関しては、「テレビや新聞などで知った」が8人(42.1%)、「本を読んだ」人は3人(15.8%)であり、そのうち「テレビや新聞などで知った」のみの人は2人、「本を読んだ」のみの人はいなかった。

表1 統合失調症の知識

	人	%
統合失調症を知っている	19	19.0
名前は知ってる	33	33.0
聞いたような気がする	18	18.0
知らない	29	29.0
無回答	1	1.0
全体	100	100.0

表2 どのようにして知ったか(複数回答)

	人	%
家族・身近に当事者	0	0.0
知り合いが当事者	2	3.8
ボランティア経験あり	2	3.8
TVや新聞で知った	36	69.2
本を読んだ	8	15.4
知人から聞いた	5	9.6
市民講座など受けた	12	23.1
その他	7	13.5
全体	52	100.0

(5) 精神障害者に対する意識

無回答1人を除く99人についての精神障害者に対する意識を表3に示した。

Aさんが隣に引っ越してきた場合に「困っている時は、できるだけ手を貸す」と答えた人は16人(16.2%)、「他の人と同じような近所付き合いをする」が70人(70.7%)「あまりかかわらないようにする」が13人(13.1%)「他の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった。「できるだけ手を貸す」と「同じような近所付き合い」と答えた人は、精神障害者に対して肯定的な意識を持つと考えられ、このような人は8割を越えている。

また、Aさんが動物好きだった場合も「できるだけ手を貸す」は20人(20.2%)、「同じような近所付き合い」が66人(66.7%)「あまりかかわらないようにする」が13人(13.1%)「他の場所に住むように働きかける」と答えた人はいなかった。「できるだけ手を貸す」と「同じような付き合い」を肯定的、「あまり関わらない」と「他の場所へ働きかけ」を否定的とした場合、Aさんが動物好きかどうかで肯定的・否定的である

表3 精神障害者に対する意識

	Aさんが隣へ		Aさんが動物好き		
	人	%	人	%	
できるだけ手を貸す	16	16.2	20	20.2	ることに
同じような付き合い	70	70.7	66	66.7	はないが、
あまり関わらない	13	13.1	13	13.1	Aさんが動物好
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	きだった場合は、
全体	99	100.0	99	100.0	肯定的

な人の中で積極的な支援に変化する人が少しいるようである。

(6) 知識の有無と精神障害者に対する意識

統合失調症を「知っている」と答えた19人のうち、無回答1人を除く18人について精神障害者に対する意識を調べた。(表4)

「できるだけ手を貸す」が3人(16.7%)、「同じような付き合い」が10人(55.6%)、「あまり関わらない」が5人(27.8%)であった。「知っている」以外に答えた81人のうち、「できるだけ手を貸す」が13人(16.0%)、「同じような付き合い」が60人(74.1%)、「あまり関わらない」が8人(9.9%)であった。

「できるだけ手を貸す」と「同じような付き合い」を肯定的、「あまり関わらない」と「他の場所へ働きかけ」を否定的とした場合、知識の有る人と無い人の精神障害者に対する意識の違いは見られなかった。

表4 知識の有無と精神障害者に対する意識

	知識有り		知識無し		全体(無回答1)		「手を貸す・同じ付き合い」× 「関わらない・他の場所へ」
	人	%	人	%	人	%	
できるだけ手を貸す	3	16.7	13	16.0	16	16.2	P=0.99
同じような付き合い	10	55.6	60	74.1	70	70.7	
あまり関わらない	5	27.8	8	9.9	13	13.1	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	18	100.0	81	100.0	99	100.0	

注: Fisher's test[無回答は除く]

(7) テレビや新聞による知識と精神障害者に対する意識

統合失調症を「知っている」と答えた人のうち、TVや新聞のみから知識を得た人は少なかった。そこで、「知っている」「名前だけは知っている」と答えた52人のうち、テレビや新聞のみから知識を得たり、名前を知った人23人がど

表5 TVや新聞のみによる精神障害者に対する意識

	人	%
できるだけ手を貸す	3	13.0
同じような付き合い	18	78.3
あまり関わらない	2	8.7
他の場所へ働きかけ	0	0.0
全体	23	100.0

のようなイメージを持っているかを調べた。(表5)

「できるだけ手を貸す」が3人(13.0%)、「同じような付き合い」が18人(78.3%)、「あまり関わらない」が2人(8.7%)であった。

(8) 飼育経験者と非飼育経験者の精神障害者に対する意識

無回答を除く96人を飼育経験者群と非飼育経験者群とに分け、精神障害者に対する意識を比較した。(表6)

飼育経験者80人のうち、「できるだけ手を貸す」が14人(17.5%)、「同じような付き合い」が57人(71.3%)、「あまり関わらない」は9人(11.3%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。非飼育経験者16人のうち、「できるだけ手を貸す」が2人(12.5%)、「同じような付き合い」が10人(62.5%)、「あまり関わらない」は4人(25.0%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。これらを比較した場合、意識の違いは見られなかった。

表6 飼育経験者と非飼育経験者の精神障害者に対する意識

	飼育経験者		非飼育経験者		全体(無回答4)		「手を貸す・同じ付き合い」× 「関わらない・他の場所へ」
	人	%	人	%	人	%	
できるだけ手を貸す	14	17.5	2	12.5	16	16.7	P=0.14
同じような付き合い	57	71.3	10	62.5	67	69.8	
あまり関わらない	9	11.3	4	25.0	13	13.5	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	80	100.0	16	100.0	96	100.0	

注: Fisher's test[無回答は除く]

(9) 現在飼育者と現在非飼育者の精神障害者に対する意識

無回答を除く94人を現在の飼育者群と現在の非飼育者群とに分け、精神障害者に対する意識を比較した。(表7)

現在の飼育者37人のうち、「できるだけ手を貸す」が8人(21.6%)、「同じような付き合い」が25人(67.6%)、「あまり関わらない」は4人(10.8%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。現在の非飼育者57人のうち、「できるだけ手を貸す」が8人(14.0%)、「同じような付き合い」が40人(70.2%)、「あまり関わらない」は9人(15.8%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。これらを比較した場合にも意識の違いは見られなかった。

表7 現在飼育者と非飼育者の精神障害者に対する意識

	現在飼育者		現在非飼育者		全体(無回答6)		「手を貸す・同じ付き合い」× 「関わらない・他の場所へ」
	人	%	人	%	人	%	
できるだけ手を貸す	8	21.6	8	14.0	16	17.0	P=0.36
同じような付き合い	25	67.6	40	70.2	65	69.1	
あまり関わらない	4	10.8	9	15.8	13	13.8	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	37	100.0	57	100.0	94	100.0	

注: Fisher's test[無回答は除く]

(10) 知識の無い飼育経験者と非飼育経験者の精神障害者に対する意識

統合失調症を「知っている」と答えた19人以外は、名前だけは知っているがどのような病気なのか知らない、あるいは、まったく知識を持たない人だと考えられる。

無回答3人を除く知識を持たない77人を飼育経験者群と非飼育経験者群とに分け、精神障害者に対する意識を比較した。(表8)

飼育経験者63人のうち、「できるだけ手を貸す」が11人(17.5%)、「同じような付き合い」が48人(76.2%)、「あまり関わらない」は4人(6.3%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。非飼育経験者では、「できるだけ手を貸す」が2人(14.3%)、「同じような付き合い」が8人(57.1%)、「あまり関わらない」は4人(28.6%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。これらを比較した場合、飼育経験者の方が有意に肯定的であった。

表8 知識の無い飼育経験者と非飼育経験者の精神障害者に対する意識

	飼育経験者		非飼育経験者		全体(無回答3)		「手を貸す・同じ付き合い」× 「関わらない・他の場所へ」
	人	%	人	%	人	%	
できるだけ手を貸す	11	17.5	2	14.3	13	16.9	P=0.03
同じような付き合い	48	76.2	8	57.1	56	72.7	
あまり関わらない	4	6.3	4	28.6	8	10.4	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	63	100.0	14	100.0	77	100.0	

注: Fisher's test[無回答は除く]

(11) 知識の無い現在飼育者と現在非飼育者の精神障害者に対する意識

知識を持たない人の中で、無回答5人を除いた現在の飼育者群と現在の非飼育者群とに分け、精神障害者に対する意識を比較した。(表9)

現在の飼育者27人のうち、「できるだけ手を貸す」が6人(22.6%)、「同じような付き合い」が21人(77.8%)、「あまり関わらない」「他の場所へ働きかけ」はいなかった。現在非飼育者48人のうち、「できるだけ手を貸す」が7人(14.6%)、「同じような付き合い」が33人(68.8%)、「あまり関わらない」は8人(16.7%)であり、「他の場所へ働きかけ」はいなかった。これらを比較した場合、現在飼育している人の方が有意に肯定的であった。

表9 知識の無い現在飼育者と非飼育者の精神障害者に対する意識

	現在飼育者		現在非飼育者		全体(無回答5)		「手を貸す・同じ付き合い」× 「関わらない・他の場所へ」
	人	%	人	%	人	%	
できるだけ手を貸す	6	22.2	7	14.6	13	17.3	P=0.02
同じような付き合い	21	77.8	33	68.8	54	72.0	
あまり関わらない	0	0.0	8	16.7	8	10.7	
他の場所へ働きかけ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
全体	27	100.0	48	100.0	75	100.0	

注: Fisher's test[無回答は除く]

3. 考察

専門学校生を対象に調査を行ったため 20 才前後の若い人が多いという限定がある。

精神障害者に対する意識について、知識が有る人と無い人の間に差はみられず、知識をどのようにして得たかに関してはテレビや新聞報道から情報を得た人が圧倒的に多かった。事件報道から情報得た人はイメージ悪く偏見が強いのに対し、専門書から情報を得た人は偏見が低いという研究(坂本, 丹野:1996)があり、これは、過去に行われていた通院歴などの報道パターンが要因となっていると考えられる。本調査においてはテレビや新聞の報道のみから知識を得た人の9割以上が肯定的な意識をもっていたことから、最近では報道する側も精神障害者に対する配慮がなされるようになってきたことに加え、新聞やテレビの報道内容が以前とは異なり、精神障害者の暮らしぶりやドキュメントといった事件報道ではない番組なども放送されるようになってきていることが要因の一つにあげられるだろう。

精神障害者に対する意識に関して、動物飼育経験者と非飼育経験者の間には違いは見られず、同様に、現在の動物飼育者と非飼育者との間にも意識の違いは見られなかった。

しかし、知識を持たない人の中で、動物飼育経験者と非飼育経験者、あるいは、現在の動物飼育者と非飼育者とに分けた場合、動物飼育経験者は非飼育経験者よりも精神障害者に対する意識が肯定的であり、また、現在の動物飼育者は現在非飼育者よりも肯定的であった。

これらのことから、知識を持たない人の場合は、動物飼育経験者や現在動物を飼育している人が精神障害者の地域生活を受け入れる支援者となる可能性があると考えられる。動物飼育者が表面に表れる属性を考えた場合、ペットショップへフードなどを買いに行くという行動が考えられるのではないだろうか。

文 献

- 大島巖「精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度 ―尺度の妥当性を中心に―」精神保健研究 4(通巻 38)1992, 25-37
- 大島巖, 中村佐織, 山崎喜比古, 小沢温, 三田優子, 園田恭一「障害者を包み込んだ保健と福祉のコミュニティづくりに関する調査研究 ―福祉施設や精神病院の社会化・開放化と周辺住民の受け入れ姿勢―」『保健と福祉のコミュニティづくりに関する研究』昭和 61 年度文部省科学研究報告書 (園田恭一代表) 1988, 109-237
- 大島巖, 山崎喜比古, 中村佐織, 小沢温「日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観」社会精神医学 12(3) 1989, 286-297
- 坂本真士, 丹野義彦「精神疾患への偏見の形成に与る要因の検討(Ⅱ)―接触体験の欠如とメディアからの情報について」日本教育心理学会発表論文集 38, 1996, 307

動物飼育経験と精神障害者に対する意識に関するアンケート

関西福祉科学大学大学院で精神障害者の地域生活に関する研究をしている御前由美子と申します。お手数ですが、アンケートにぜひご協力いただきますようお願い致します。

なお、無記名で、統計的に処理いたしますので、みなさまにご迷惑をおかけすることは一切ございません。どうかよろしくお願いいたします。

まず、あなたについておたずねします。

[1]あなたの性別は？

あてはまるものに印をつけて下さい

- ☐ 男性
☐ 女性

[2]あなたの年齢は？

の中にご記入下さい

才

動物についておたずねします。

[3]動物は好きですか？

1つだけ選んで下さい

<input type="checkbox"/> 好き	→ [4]へ
<input type="checkbox"/> どちらかといえば好き	→ [4]へ
<input type="checkbox"/> どちらかといえば嫌い	↓ [5]へ
<input type="checkbox"/> 嫌い	↓ [5]へ

[4]どんな動物が好きですか？

いくつでも選んで下さい

<input type="checkbox"/> 犬	<input type="checkbox"/> は虫類
<input type="checkbox"/> ねこ	<input type="checkbox"/> ねずみ類
<input type="checkbox"/> 魚類	<input type="checkbox"/> 昆虫類
<input type="checkbox"/> 鳥類	<input type="checkbox"/> さる類
<input type="checkbox"/> うさぎ	<input type="checkbox"/> その他

[5]動物を飼ったことがありますか？

<input type="checkbox"/> はい	→ [6]へ
<input type="checkbox"/> いいえ	↓ [7]へ

[6]どんな動物を飼ったことがありますか？

いくつでも選んで下さい

<input type="checkbox"/> 犬	<input type="checkbox"/> は虫類
<input type="checkbox"/> ねこ	<input type="checkbox"/> ねずみ類
<input type="checkbox"/> 魚類	<input type="checkbox"/> 昆虫類
<input type="checkbox"/> 鳥類	<input type="checkbox"/> さる類
<input type="checkbox"/> うさぎ	<input type="checkbox"/> その他

[7]現在動物を飼っていますか？

<input type="checkbox"/> はい	→ [8]へ
<input type="checkbox"/> いいえ	↓ [9]へ

[8]どんな動物を飼っていますか？

いくつでも選んで下さい

<input type="checkbox"/> 犬	<input type="checkbox"/> は虫類
<input type="checkbox"/> ねこ	<input type="checkbox"/> ねずみ類
<input type="checkbox"/> 魚類	<input type="checkbox"/> 昆虫類
<input type="checkbox"/> 鳥類	<input type="checkbox"/> さる類
<input type="checkbox"/> うさぎ	<input type="checkbox"/> その他

資料 1 つづき

精神障害についておたずねします。

[9]「統合失調症」という病気を知っていますか？[10]どのように知りましたか？

1つだけ選んで下さい

いくつでも選んでください

<input type="checkbox"/> 知っている <input type="checkbox"/> 名前だけは知っている <input type="checkbox"/> 聞いたような気がする <input type="checkbox"/> 知らない	<input type="checkbox"/> 家族や身近な人が、かかっている <input type="checkbox"/> 知り合いが、かかっている <input type="checkbox"/> ボランティアなどでかかわったことがある <input type="checkbox"/> テレビや新聞で知った <input type="checkbox"/> 本を読んで知った <input type="checkbox"/> 知人から聞いた <input type="checkbox"/> 市民講座や講義を受けた <input type="checkbox"/> その他
---	---

次の事例を読んでお答え下さい

統合失調症で精神病院に入院したことのあるAさん(35才、男性、独身)は、病気がよくなったので、主治医の勧めでアパートを借りて生活しようと考え、何軒かの大家さんに当たりましたが、すべて断られてしまいました。

たしかにAさんには、気力が続かず、長時間の勤めには出られない後遺症が残っていますし、多少ハキハキしないところもあります。しかし、短時間の軽作業をするために同じ病気の人達が通う作業所には、毎日行くことができます。それに人柄はまじめですし、買い物や炊事なども一般の人と同じようにできるのです。

アパート入居を断られてAさんは、精神病院に入院していたということで入居できないのは本当にくやしいと思ったそうです。

[11]あなたのとなりにAさんが引っ越してきた場合、どのような近所付き合いをしますか？

もっとも近いものを1つだけ選んでください

<input type="checkbox"/> 困っている時は、できるだけ手を貸す <input type="checkbox"/> 他の人と同じような近所付き合いをする <input type="checkbox"/> あまりかかわらないようにする <input type="checkbox"/> 他の場所に住むように働きかける
--

[12]Aさんは現在、動物は飼っていないのですが、もし動物好きの場合、どのような近所付き合いをしますか？

もっとも近いものを1つだけ選んでください

<input type="checkbox"/> 困っている時は、できるだけ手を貸す <input type="checkbox"/> 他の人と同じような近所付き合いをする <input type="checkbox"/> あまりかかわらないようにする <input type="checkbox"/> 他の場所に住むように働きかける
--

ご協力ありがとうございました

		基 礎 集 計		年 齢 別		N=100			
		10代		20代		30代		全体	
		人	%	人	%	人	%	人	%
[1]	性別								
	男	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	女	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0
	全体	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0
[3]	動物が好きか								
	好き	40	58.8	11	47.8	5	55.6	56	56.0
	どちらかといえば好き	21	30.9	9	39.1	3	33.3	33	33.0
	どちらかといえば嫌い	3	4.4	3	13.0	1	11.1	7	7.0
	嫌い	3	4.4	0	0.0	0	0.0	3	3.0
	無回答	1	1.5	0	0.0	0	0.0	1	1.0
	全体	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0
[4]	種類(複数回答)								
	犬	59	96.7	19	95.0	8	100.0	86	96.6
	ねこ	29	47.5	8	40.0	3	37.5	40	44.9
	魚類	8	13.1	4	20.0	0	0.0	12	13.5
	鳥類	11	18.0	2	10.0	2	25.0	15	16.9
	うさぎ	25	41.0	6	30.0	3	37.5	34	38.2
	両生類・は虫類	7	11.5	0	0.0	0	0.0	7	7.9
	ねずみ類	13	21.3	1	5.0	0	0.0	14	15.7
	昆虫類	0	0.0	0	0.0	1	12.5	1	1.1
	さる類	12	19.7	4	20.0	0	0.0	16	18.0
	その他	7	11.5	2	10.0	0	0.0	9	10.1
[5]	飼育経験								
	あり	54	79.4	20	0.0	7	77.8	81	81.0
	なし	11	16.2	3	0.0	2	22.2	16	16.0
	無回答	3	4.4	0	0.0	0	0.0	3	3.0
	全体	68	100.0	23	0.0	9	100.0	100	100.0
[6]	種類(複数回答)								
	犬	29	53.7	14	70.0	6	85.7	49	60.5
	ねこ	6	11.1	5	25.0	1	14.3	12	14.8
	魚類	39	72.2	15	75.0	3	42.9	57	70.4
	鳥類	11	20.4	7	35.0	2	28.6	20	24.7
	うさぎ	11	20.4	3	15.0	1	14.3	15	18.5
	両生類・は虫類	7	13.0	2	10.0	0	0.0	9	11.1
	ねずみ類	21	38.9	5	25.0	1	14.3	27	33.3
	昆虫類	15	27.8	3	15.0	1	14.3	19	23.5
	さる類	2	3.7	0	0.0	0	0.0	2	2.5
	その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
[7]	現在飼育しているか								
	現在飼育	26	38.2	7	30.4	4	44.4	37	37.0
	現在非飼育	37	54.4	15	65.2	5	55.6	57	57.0
	無回答	5	7.4	1	4.3	0	0.0	6	6.0
	全体	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0

資料 2 つづき

[8] 種類(複数回答)								
犬	18	69.2	5	71.4	4	100.0	27	73.0
ねこ	2	7.7	3	42.9	1	25.0	6	16.2
魚類	4	15.4	2	28.6	1	25.0	7	18.9
鳥類	1	3.8	1	14.3	0	0.0	2	5.4
うさぎ	3	11.5	1	14.3	0	0.0	4	10.8
両生類・は虫類	1	3.8	0	0.0	0	0.0	1	2.7
ねずみ類	2	7.7	1	14.3	0	0.0	3	8.1
昆虫類	1	3.8	0	0.0	0	0.0	1	2.7
さる類	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
[9] 統合失調症を知っているか								
知っている	4	5.9	11	47.8	4	44.4	19	19.0
名前だけ知っている	20	29.4	9	39.1	4	44.4	33	33.0
聞いたような気がする	15	22.1	3	13.0	0	0.0	18	18.0
知らない	28	41.2	0	0.0	1	11.1	29	29.0
無回答	1	1.5	0	0.0	0	0.0	1	1.0
全体	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0
[10] どのように知ったか(複数回答)								
家族・身近に当事者	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
知り合いが当事者	1	4.2	1	5.0	0	0.0	2	3.8
ボランティア経験がある	1	4.2	1	5.0	0	0.0	2	3.8
TVや新聞で知った	18	75.0	14	70.0	4	50.0	36	69.2
本を読んだ	3	12.5	3	15.0	2	25.0	8	15.4
知人から聞いた	2	8.3	2	10.0	1	12.5	5	9.6
市民講座などを受けた	5	20.8	6	30.0	1	12.5	12	23.1
その他	2	8.3	3	15.0	2	25.0	7	13.5
[11] Aさんが引っ越し								
手を貸す	12	17.6	3	13.0	1	11.1	16	16.0
他の人と同じつきあい	49	72.1	15	65.2	6	66.7	70	70.0
関わらない	6	8.8	5	21.7	2	22.2	13	13.0
他の場所へ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	1	1.5	0	0.0	0	0.0	1	1.0
全体	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0
[12] Aさんが動物好き								
手を貸す	14	20.6	5	21.7	1	11.1	20	20.0
他の人と同じつきあい	47	69.1	13	56.5	6	66.7	66	66.0
関わらない	6	8.8	5	21.7	2	22.2	13	13.0
他の場所へ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	1	1.5	0	0.0	0	0.0	1	1.0
全体	68	100.0	23	100.0	9	100.0	100	100.0

6 章 全体の考察

一動物飼育（経験）者が精神障害者の地域生活における支援者となる可能性について一

厚生労働省が2003年度からの10年間で社会的入院患者（約72000人）の退院・社会復帰を目指すという目標を掲げたにもかかわらず、2006年においてもまだ7万人が社会的入院を余儀なくされている。

精神障害者は病気の問題だけではなく、生活の様々な面で影響を受け（Link:1982, Link:1987, Link, Cullen et al:1989, Link, Mirotznik et al:1991, Corrigan, Penn: 1999）地域生活を困難にしている場合が多い。

精神障害者の地域生活を困難にするものの1つに精神障害者に対する偏見があるとされている（北村:1998, 焼山:2003）。

この偏見を除去するために、第1章で触れたような精神障害者に対して受容的・拒否的な属性（性別・年齢・学歴・収入など）に関する研究が行われてきた。しかし、これらの研究に一貫した結果は得られていない。もし、学歴や収入などといった属性に一貫した結果が得られたとしても、これらの属性は外部からは見えない属性であるためアプローチを行うことが難しいという問題がある。

一方、偏見を除去するためには正しい知識の普及や接触体験が重要であるとされてきたことから、地域での具体的な取り組みとして市民講座やイベントなどが行われてきた。

精神障害に対する理解は広がりつつあるという研究（宗像:1984, WPA:2002, Woodward:1951, Lemkau et al:1962, Meyer:1964, Bentz et al:1969, 竹島他:1997, 全家連1998）がある。しかし、糖尿病、脳卒中、心筋梗塞というような病気に関する市民講座では、参加者のほとんどが一般市民であるのに対し、第2章におけるイベントでの調査の結果では、精神障害に関する知識を持たないであろうと思われる一般市民の参加は少なかった。市民講座やイベント参加者は関係者が多く、一般市民の参加は少ないといわれていることから、これは予想された結果であった。市民講座やイベントなどにわざわざ参加をしてまで知識を得ようとする人が少ないのは、精神障害が誰でもなる可能性のある病気だという認識がまだ薄いということが要因の一つであることは確かだろう。また、イベントに参加する人たちのほとんどが精神障害者に対して肯定的であるという結果も予想できるものであった。イベントに参加した人たちは、精神障害に関心があるために参加したであろうし、イベントに参加したことによって決して特別な人がかかる病気ではないという知識も得ただろう。正しい知識を得ることで受け入れに肯定的になることは当然である。

市民講座やイベントは大規模なものを行うよりも、規模は小さくとも地域住民の身近な場所で回数を多く開いた方がよいのではないだろうか。そして、糖尿病などのように身近な病気だという認識を少しでも多くの人に持ってもら

えるようにしていくことが大切だと思われる。

また、このイベント調査では、自治会役員・民生委員・地区福祉委員が婦人会・ボランティアよりも精神障害者に対して受け入れに積極的であったことから、精神障害者の地域生活を積極的に支援する人を獲得するために自治会役員・民生委員・地区福祉委員に精神保健ボランティアへの参加を積極的に呼びかけることが有効だと考えられる。

具体的に働きかける属性が見出されていないことやイベント調査における一般市民の参加が少ないという結果から、従来行われてきたような方法だけでは精神障害者の偏見を除去し、7万人の社会的入院患者の地域生活を支援するための人的資源を拡充することは容易いことではないと予想される。

このことから、従来行われてきたような方法だけではなく、従来とは異なったアプローチを従来の方法に加えることにより精神障害者を支援する人を拡充することが必要ではないかと考えた。そこで、元来受容的な人へのアプローチを加えた1つのモデルを提案した。さらに、これまでの研究から共感性と援助行動の関連が報告されていることから、受容的な人の要因の1つとして共感性が考えられた。しかし、共感性の高い人がどのような属性として表面に表れるのかということがわからなければ、このような人たちにアプローチを行うことはできない。

そこで、共感性と動物飼育経験との関連を手がかりに動物病院を訪れる受診者を対象に精神障害者に対する意識を調査し、これまで行われてきた一般市民を対象にした調査（大島他：1989, 大島他：1988, 大島：1992, 全家連：1998）とを比較した結果、動物病院を訪れる受診者の方が精神障害者に対して有意に肯定的であった。確かに、動物病院を訪れる人すべてが共感性の高い人だとは考えていないし、個々に見ると様々な飼育者がいることは承知している。しかし、精神障害者の地域生活を支援する人を拡充するための有効な手段が見つからない現状において、動物飼育者は手がかりの1つとなるのではないかと考えている。動物飼育経験者を探すことは難しいが動物病院を訪れるという行動は外部から見える属性となるため、動物病院の受診者にアプローチを行うことは可能である。

動物病院の数は近年のペットブームで増え続けており、2006年5月においては全国で9004医院（家畜医院は除く）であり、2009年には9454医院になると予想されている（カトー）。動物病院に協力を求め、動物病院受診者に精神障害に関する知識が得られるパンフレットなどを配布させてもらうというようなことも考えられ、動物病院という場が啓発活動の場の1つとなる可能性が生まれるであろう。

さらに、動物病院以外の手がかりを探すため、専門学校において精神障害者に対する意識調査を行い、動物飼育経験者群と非飼育経験者群、現在の飼育者群と非飼育者群とを比較した。その結果、動物飼育経験者群と非飼育経験者群、現在の飼育者群と非飼育者群の間に精神障害者に対する意識の違いは見られなかった。また、知識に関してはテレビや新聞から知識を得ている人が多く、今

後もメディアは精神障害者に対する報道の方法や番組内容に気を配ることが必要であると考えられる。

動物飼育経験者群と非飼育経験者群、現在の飼育者群と非飼育者群の間に精神障害者に対する意識の違いは見られなかったが、精神障害に関する知識がない場合は非飼育経験者群よりも動物飼育経験者群の方が有意に肯定的であり、また、非飼育者群よりも現在の飼育者群の方が有意に肯定的であった。

ペットフード工業会の全国調査によると、2005年に犬は約1300万頭、猫は約1200万頭飼育されており、犬と猫を飼育している世帯数は1848万世帯（カトー）とされている。また、フードに関しては、「ほとんどの人がペット専用のえさを購入」（東京都生活文化局消費生活部流通対策課：2001）しているという報告や、犬の飼育者のうちほとんどドッグフードを与えている人は68.8%、7～8割ドッグフードを与えている人をあわせると9割近くになる（ペットフード工業会）という調査もある。このようなことから、現在の飼育者はペットショップでのフードや用品購入という行動に現れる可能性が高く、現在の飼育者もアプローチの対象となるのではないかと考えている。もちろん、動物病院受診者と同じように、飼育者の中でも眉をひそめたくないような飼い方をしているような人があるも承知している。しかし、少なくともペットショップに行くという見える行動に表れる可能性が高い属性といえるだろう。

ペット関連の市場の構成比においてフードが55.4%を占めているが、ペット用品の25.7%に続き、生体も14.5%であり、ペットが小売から飼育者に販売された数は合計83000頭である（環境省：2003）。現在飼育をしていない人に関して、2人以上世帯で犬の飼育意向のある人は49.7%、猫の飼育意向は21.5%、また、単身世帯でも犬は50.3%、猫は28.8%である（ペットフード工業会）。また、Endenburgら（1995）によると、Paul（1992）は子ども時代にペットを飼っていた人の方が成人してからもペットを飼う可能性ははるかに高いと述べており、Serpell（1981）も同様の報告をしている。このようなことから、現在飼育をしていなくても飼育意向をもつ人や飼育経験者がペットショップで子犬などを見ることもあったと考えられ、動物病院に加え、ペットショップも有力な啓発活動の場となる可能性があるのではないだろうか。

本研究は、あくまでも仮説にすぎないうえ、当事者の視点を欠くものである。今後は、当事者を中心とした偏見除去や地域生活支援者の拡充の取り組みに役立てていくことが課題であると考えている。

文 献

- Bentz, Edgerton and Kherlopian Perceptions of mental illness among people in a rural area *Mental Hygiene*, 53, 1969, 459-465
- Corrigan, Penn Lessons from social psychology on discrediting psychiatric stigma. *American Psychologist*, 54(9), 1999, 765-776
- Endenburg, N., Baarda, B. 「人の健全な生活に貢献するペットの役割： こどもの発達への影響」 1995 ロビンソン編 山崎恵子訳『人と動物の関係学』インターズー2000
- 環境省「ペット動物流通販売実態調査報告書」平成 15 年 3 月
http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/pamf_rep/pdf_index.html
- カトー「動物病院の数」<http://www3.ocn.ne.jp/~kk123/byouingennjyou.html>
- 北村俊則「精神疾患を有する人々の社会参加を阻むもの」精神保健研究 44, 1998, 3-4
- Lemkau, P. V., Crocetti, G. M. An urban population's opinion and knowledge about mental illness. *American Journal of Psychiatry*, 118, 1962, 692-700
- Link, B. G. Mental patient status, work, and income: An examination of the effects of a psychiatric label. *American Sociological Review*, 47, 1982, 202-215
- Link, B. G. Understanding labeling effects in the area of mental disorders: An assessment of the effects of expectations of rejection. *American Sociological Review*, 52, 1987, 96-112
- Link, B. G., Cullen, F. T. et al. A modified labeling theory approach to mental disorders: An empirical assessment. *American Sociological Review*, 54, 1989, 400-423
- Link, B. G., Mirotznik, J., Cullen, F. T. The effectiveness of stigma coping orientations: Can negative consequences of mental illness labeling be avoided? *Journal of Health and Social Behavior*, 32, 1991, 302-320
- Meyer. Attitudes toward mental illness in a Maryland community. *Public Health Reports*, 79(9), 1964, 769-772
- 宗像恒次『精神医療の社会学』弘文堂 1984
- 大島巖「精神障害者に対する一般住民の態度と社会的距離尺度 一尺度の妥当性を中心に」精神保健研究 4 (通巻 38) 1992, 25-37
- 大島巖, 中村佐織, 山崎喜比古, 小沢温, 三田優子, 園田恭一「障害者を包み込んだ保健と福祉のコミュニティづくりに関する調査研究 一福祉施設や精神病院の社会化・開放化と周辺住民の受け入れ姿勢一」『保健と福祉のコミュニティづくりに関する研究』昭和 61 年度文部省科学研究報告書 (園田恭一代表) 1988, 109-237
- 大島巖, 山崎喜比古, 中村佐織, 小沢温「日常的な接触体験を有する一般住民の精神障害者観」社会精神医学 12(3), 1989, 286-297

ペットフード工業会「犬猫飼育率 全国調査・ペットフード流通量調査 第12
回犬猫飼育率全国調査」<http://www.jppfma.org/shiryo/handbook-set.html>
Serpell, J. A. Childhood pets and their influence on adult's attitudes.
Psychological Reports, 49, 1981, 651-654
竹島正、寺峰いつ子他「精神保健領域におけるノーマライゼーション推進の視
点について」精神保健研究, 43, 1997, 67-74
東京都生活文化局消費生活部流通対策課「ペットに関する調査報告書」平成13
年3月 <http://www.hias.co.jp/11/anicom/houkoku.htm>
Woodward, J. L. Changing ideas on mental illness and its treatment. American
Sociological Review, 16, 1951, 443-454
WPA, Schizophrenia -Open the door-, 2002. 日本精神神経学会監訳『こころの扉
を開くー統合失調症の正しい知識と偏見克服プログラムー』医学書院, 2002
焼山和憲、伊藤直子他「精神障害者に対する地域住民の社会的距離に関する研
究ー地域ケアを阻む要因分析ー」西南女学院大学紀要 7, 2003, 7-18
全国精神障害者家族会連合会『精神障害者観の現状' 97』ぜんかれん保健福祉
研究所モノグラフ 22, 1998

おわりに

1874年3月に「狂病を発する者はその家族において嚴重監護せしむ」という警視庁命令が出され（芹沢：2005）、その後、精神障害者は社会から排除されるという方向に進んできた。

「西欧において、狂気というものに精神疾患としての地位が与えられたのは、比較的最近のことである。狂気はあたりを歩きまわり、一般の背景や言語の一部をなしていた。それは各人にとって日常的な体験であって、それを抑制するよりは、むしろ大切にしていたのである」。そして、「病としてみとめられながら、しかもある集団内で地位と役割を持っているものがある。この場合、病的なものとは、文化の型に対して、もはや単なる逸脱を意味するものではなくなる。というのは、病はこの文化の型の一要素、一表現となるからである」と Foucault（1966）は述べている。

日本においても「晩年脳を病んで狂った」とされる三代目蝶花楼馬楽は文士岡村柿江たちに認められ、社会的にも認められていた（小島：1969）というように、精神障害であったと考えられる小説家、詩人、画家、彫刻家、作曲家などの芸術家は多いとされる（山田：1999）。

芸術家ではない一般の人に関しても、柳田国男は『遠野物語』の中で山に入った後、心中を読むようになった人や『山の人生』の中で山に走りこんでいく人などの様子を描き、「昔の精神錯乱と今日の発狂との著しい相異は、じつは本人に対する周囲の者の態度にある」と述べている。また、夏目漱石の『我輩は猫である』では、苦沙弥先生のところへ「在巢鴨 天道公平」という人から、急に海鼠（なまこ）やせつな糞が出てくる意味のわからない手紙が届くが、苦沙弥先生は感心して読んでいる。

日本において精神障害者は「遍路、鉢叩き、節季候など」のように「社会から切り離されたり隔離されたりすることなく、ひとつは民間信仰がらみで、他方には、村落や家族などの共同体のなかにとりこまれる形で、一般の生活に溶け込んで存在していた」と小田（1990）は述べている。このように、精神障害者は排除されることなく普通に地域生活を送っていたのである。

しかし、現在では精神障害者に対する偏見が大きな要因となり、精神障害者が地域で生活を送る上で様々な困難を抱えている場合が多い。また、精神障害者の地域生活を支えるための精神保健ボランティアが各地で活動を行っているが、精神保健ボランティアを「知っている」と答えた人は8.9%にすぎない（矢島他：2003）という現状である。

精神障害者が地域生活を送るためには地域住民の支援が不可欠である。今後は、従来行われてきた方法とは異なる方向からのアプローチを従来の方法に加えることで効果的な啓発活動を行い、精神障害者に対する理解を広め、積極的な支援者を拡充する必要があるだろう。

文 献

- Foucault, M. *Maladie mentale et psychologie*. M・フーコー 神谷美恵子訳『精神疾患と心理学』みすず書房 1979
- 小島貞二『落語名作全集別巻＜高座変人奇人伝＞』立風書房 1969
- 夏目漱石『我輩は猫である』角川書店 1972
- 小田晋『日本の狂気誌』思索社 1990
- 矢島まさえ、梅林奎子他「山間地域における精神保健福祉に関する住民意識—精神障害者と接触した体験の有無による比較—」群馬パース学園短期大学紀要 5(1), 2003, 3-12
- 山田和夫「芸術家とその作品にみる精神疾患」こころの科学 86, 1999, 103-108
- 柳田国男『遠野物語・山の人生』岩波書店 1993

謝 辞

本研究にあたり、関西福祉科学大学におけるイベントにご協力頂きました関係者の皆様、また、動物病院調査にご協力いただきましたロン動物病院の姚龍幸院長、姚慶子獣医師、スタッフの方々、和歌山大学付属小学校（当時）の竹光眞佐人先生、また、兵庫歯科学院専門学校関係者の皆様、ご指導を賜りました諸先生方に厚く御礼申しあげます。そして、これらのアンケートにお答えいただきました方々に深く感謝申しあげます。